



Title	キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡：日葡辞書 稿本とキリシタン版国字本を中心に
Author(s)	岸本, 恵実; 中野, 遙; 白井, 純 他
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 129-184
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡

——日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に——

岸本 恵実 中野 遙 白井 純 豊島 正之

キーワード：トゥールーズ断簡、キリシタン文献、日葡辞書、Agnus Dei、イエズス会

1. はじめに

本稿は、フランス・トゥールーズの Bibliothèque d'étude et du patrimoine（研究と文化遺産の図書館）所蔵の、キリシタン版『サカラメンタ提要』（*Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda*, 1605 長崎刊）表紙の補強材に使われていた新出断簡を「トゥールーズ断簡」と称し、その概要と、このうち日葡辞書の稿本とみられる手稿および、従来知られていなかったキリシタン版国字本に焦点を絞り、現時点までの分析を報告するものである。本資料およびトゥールーズ本『サカラメンタ提要』をもとに今後解明が期待される事項は多く、本報告はその端緒である。

執筆の分担はおおむね、3. の 3.1. ～ 3.5. は中野、3.6. は豊島、4.2. は白井、その他の部分は岸本による。

掲載画像は、注記のないものは 2024 年 5 月・9 月（岸本）と、2024 年 7 月（中野）の撮影による。本断簡資料の画像全体は 2025 年、トゥールーズ図書館のデジタルライブラリー Rosalis にて公開予定とのことである。

2. トゥールーズ本『サカラメンタ提要』とトゥールーズ断簡

2.1. トゥールーズ本『サカラメンタ提要』

トゥールーズ旧市街中心部に位置する Bibliothèque d'étude et du patrimoine（研究と文化遺産の図書館）¹⁾は、約 60 万点の蔵書を有し、うち、16～18 世紀の文献が 10 万点という、

1) 蔵書数および歴史については、図書館の以下 URL によった。
<https://www.bibliotheque.toulouse.fr/pratique/nous-connaître/>
<https://www.bibliotheque.toulouse.fr/collection/description-des-collections/>
https://www.bibliotheque.toulouse.fr/wp-content/uploads/2018/12/guide_bleu_2015.pdf

地域の中心となっている図書館である。かつて *Bibliothèque municipale de Toulouse* (トゥールーズ市立図書館) の名称であったが組織改組に伴い、現在、フランスの地域拠点市立図書館であるトゥールーズ図書館 (*Bibliothèques de Toulouse*) ネットワークの一つとなっている。厳密には *Bibliothèque d'étude et du patrimoine* の方で呼ぶべきであろうが、本稿ではわかりやすさを優先し総称の「トゥールーズ図書館」を用いることがある。

Bibliothèque d'étude et du patrimoine は、1866 年、二つの図書館の合併により設立された。一つが 1775 年設立の *Bibliothèque du Clergé* (聖職者の図書館)、もう一つが 1782 年一般公開された *Bibliothèque du Collège royal* (コレージュ・ロワイヤルの図書館) である。『サカラメンタ提要』と断簡は、前者 *Bibliothèque du Clergé* の所蔵であったことが『サカラメンタ提要』の旧蔵書票 (後述) から明らかであり、1776 年 Clément Barrau により作成された *Bibliothèque du Clergé* の手書きのカatalogにも、*Rituels de divers dioceses* (さまざまな司教区の典礼書) の 1 点として書名が見える (p. 270)。*Bibliothèque du Clergé* 以前、すなわち刊行以降トゥールーズに辿り着くまでの経緯は、現在調査中である。

トゥールーズ図書館本『サカラメンタ提要』は、10 本の現存が知られる『サカラメンタ提要』の 1 本である。現存数が比較的多いのは、ルイス・デ・セルケイラ日本司教の名のもと印刷された、正式な典礼書であることと無関係ではないだろう。他には、東洋文庫、上智大学キリシタン文庫、大英図書館、オックスフォード大学ボドレイ図書館、イエズス会ローマ文書館、アムステルダム大学図書館、北京中国国家図書館 (3 本) が知られる。北京の 1 本にのみ、日本語がローマ字で印刷された附録がある。²⁾ 典礼史の資料としての研究にロペス・ガイ、井手訳 (1983) があり、楽譜を含むことから、皆川監修・解説 (2006)、竹井 (2000) など、音楽史上の研究が多い。トゥールーズ図書館においても、2003 年に開催された音楽史コレクションの展示に出ていたことがある。³⁾

続いて、トゥールーズ本『サカラメンタ提要』の書誌を、重要と思われる点に絞って述べる。この本の画像は、フランス国立図書館の Gallica およびトゥールーズ図書館の Rosalis より公開されている。

装丁は後世のものであり、黄色無地布に薄茶色の草花模様・薄緑色の刺繍線が施された柔らかない表表紙・裏表紙がある。表紙を含む全体の大きさは縦 21.6 × 横 16.0cm、厚さ 2.8cm、本体は 20.6 × 15.0cm、厚さ 2.4cm、標題紙の外枠は 19.2 × 12.0cm ある。小口は三方とも朱が塗られており、もともとあった留め紐は根元のみ残る。朱無地布の表見返しに、*Bibliothèque du Clergé* の印刷された蔵書票が貼付されている。前遊び紙 1 葉目裏には「F. M. Co」のペン書きがある。後遊び紙 4 葉目表には、「M」字と、料紙の右端に半円八つを縦に

2) 末尾に「『サカラメンタ提要』影印一覧」を付す。

3) Bellas, Canguilhem, Maillard, and Hernebring (2003:42) .

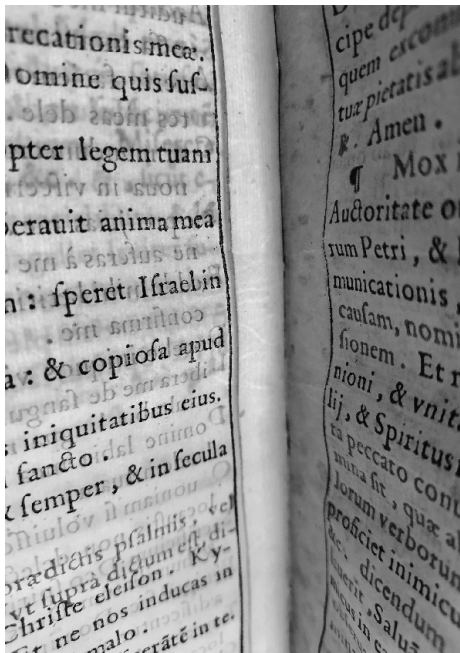
連ねたような書き入れがある。

トゥールーズ本の本体は、虫損がほぼ無いものの、落丁、二重印刷（版面に落とし薄く印字された紙を使つての印刷）、刷りの悪い箇所があるなど、善本とは言えない。しかし、多くの不完全な点があるからこそ作成過程が注目される本である。今後、現存他本との比較、断簡の校正刷の分析により、この本の特徴はより明確になろうが、現時点では目立つ特徴である料紙と落丁について記す。

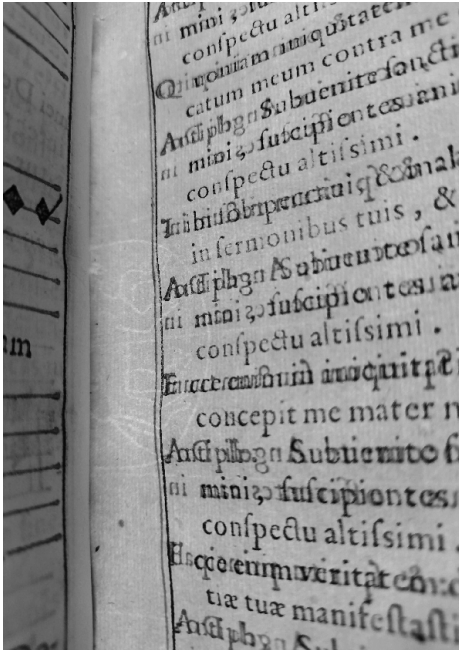
料紙には、和紙と洋紙とが混用されている。前後の遊び紙は各4葉あり、雁皮かと思われる質の良い和紙である。本体では、15～22ページ（C折）、95～102ページ（N折）、311～318ページ（Rr折）が和紙であり、遊び紙よりも茶色味が強い。そのほかは、画像のようにのどの部分に透かしが見え、洋紙と思われる。日本国内で印刷されたキリシタン版のうち洋紙が使われている本は知られておらず、使用の経緯や理由は不明である。

p. 94（M折4ウ）-p. 95（N折1オ）

p. 94 のどの透かし p. 95 より和紙か（p. 94 と色が異なり、染みがある）



p. 245 (H折4オ) のどの透かし



落丁は、119～126 ページ (Q折)、159～166 ページ (X折)、263～270 ページ (L1折)、335～342 ページ (Vv折)、375～382 ページ (b折) である。附録を除く全体が四折 (quarto) で 224 枚あるうちの、20 枚分が欠けていることになる。そのほか、寸足らずの料紙を使用していること (F折、T折など)、二重印刷が複数見られること (97、100、101 ページの朱字など) 等の不備も考え合わせると、もともとは外部に出すつもりがない本として製本されたのかもしれない。

このように個体として不備のある本ながら、トゥールーズ本は比較的早くから貴重書として注目されていたようである。現在トゥールーズ断簡中に含まれる下記フランス語のメモは、他の所蔵をローマの個人蔵しかあげていない。これはローマの個人蔵本のみあげる Satow (1888) に依拠したと思われる。⁴⁾

Ce volume est une rareté bibliographique. C'est un des premiers livres imprimés en Japon, à l'imprimerie de collège des Jésuites de Nangasaki. [この書は書誌学上珍しいものである。日本での印刷初印本の一つで、イエズス会長崎コレジオ印刷所にて印刷さ

4) Satow (1888) の後刊行された日本関係目録として、Cordier (1912) は col. 246 に大英博物館本 (現在の大英図書館本) をあげているが、トゥールーズ本のメモ作成者は参照していないようである。

れた。〕

Il n'est connu de cet ouvrage que deux exemplaires; un chez un amateur de Rome, l'autre a la Bibliothèque de Toulouse. [本書の現存が知られているのは2部だけであり、1部はローマの個人蔵、もう1部がトゥールーズ図書館蔵本である。]

トゥールーズ側の目録では、先にあげた2点のほか、「トゥールーズにおけるポルトガル」展の目録である Bibliothèque municipale Toulouse (1956:40)、貴重書目録である Caillet (1960:72) に掲載されている。また日本では、早くに土井 (1939) があげている。2024 年以前の調査としては、1973 年三橋健氏（國学院大学名誉教授）による調査が確認できている。三橋氏の調査については別途刊行予定のため、本稿では紹介にとどめるが、補強材の反古紙（現在のトゥールーズ断簡）はまだ表紙内部に綴じ込まれた状態であったとのことである。

反古紙が現れたのは、1991 年の修復時とみられる。図書館には 1991 年 5 月 15 日付の修復報告書が残っており、修復前の状況をうかがい知ることができる（詳細は上述の刊行予定書に掲載予定）。しかしこの報告は『サカラメント提要』本体に限られており、断簡についての記述はない。

当時、洋書表紙の補強材に反古紙が使われることはしばしばあった。キリシタン版においても複数の例が知られており、洋書であれば、アンジェリカ図書館蔵『ラテン文典』（1594 天草）補強材の『ぎやどぺかどる』（1599 長崎か）⁵⁾、和書であればイリノイ大学リリー図書館蔵『ぎやどぺかどる』補強材の「初期祈祷文」（現・上智大学蔵、後述）などがある。⁶⁾

2.2. トゥールーズ断簡の概要

トゥールーズ断簡は現在、34 点からなる。ほぼ3分の2が『サカラメント提要』の校正刷であり、そのほかは点数の多い順に、下記の通り分類しうる。(ii) 日葡辞書稿本は3章にて、(iv) 前期国字本とその断簡は4章にて詳述する。ここでは今後の研究に資するため (iii) の基本書誌を紹介しておく。

- (i) 『サカラメント提要』校正刷…22 点
- (ii) 日葡辞書稿本…5 点
- (iii) スペイン語免償状・ポルトガル語免償状の断簡…2 点
- (iv) 前期国字本とその断簡…3 点
- (v) その他 修復時落ちたと思われる花ざれの一部、図書館のものと思われるフランス

5) 岸本・白井編 (2022: 口絵 1) の写真参照。

6) 豊島 (2021b:352) 参照。

語のメモ（前述）…2点

(iii) の2種類の免償状（贖宥状）は、どちらも洋紙に両面印刷された断簡であり、スペイン語の方はおよそ縦 27.8 × 横 17.4cm、ポルトガル語の方はおよそ縦 27.0 × 横 15.8cm である。ロザリオのコンフラリア（信心会）の免償状である点が共通している。刊行年・刊行地名を欠くが、それぞれスペイン・ポルトガルで印刷され、日本にもたらされていたものとみられる。ポルトガル語の方は、末尾に下記の通り、天正遣欧使節を歓待しエヴォラ書簡集を刊行したことで知られるエヴォラ大司教ドン・テオトニオ・デ・ブラガンサの名がみえ、彼の在位が 1578-1602 年であることから、1602 年までに刊行されたと思われる。これら2点の研究は今後の課題の一つである。

¶ O Señor Don Theotonio de Bragança Arcebispo de Euora para louuor [...] honra da virgê gloriosa nossa Senhora & consolaçam dos Christãos de Iapã [o...]
dou imprimir & pede que em suas orações o encomêdem a Deos nosso Seño [r.]
[エヴォラ大司教ドン・テオトニオ・デ・ブラガンサは、栄光の聖母マリアを讃え、日本のキリシタンを慰めるため、印刷させ、読者の祈りの中で大司教自身を、主なる神へ薦めるように要請した。]

3. 日葡辞書稿本

3.1. 基本書誌

トゥールーズ断簡に含まれていた資料の内の主たるものの一つが、日葡辞書稿本である。ここで日葡辞書稿本と呼ぶものは、キリシタン版『日葡辞書』の原稿に関わると思われる複数の手書きの断簡資料であり、トゥールーズ断簡の内、No.01、06、07、08、11 が該当する。

キリシタン版『日葡辞書』（長崎刊）は、本篇が 1603 年、補遺篇が 1604 年に刊行されている、日本語・ポルトガル語の対訳辞書である。日本語見出し語は全篇で 30,000 語を上回り、当時の日本辞書・ポルトガル辞書の中でも類を見ない、大部の辞書である。日葡辞書は見出し語の実数だけでなく、文書語、詩歌語、仏法語をはじめ、当時の日本側の辞書には掲載されにくい幼児語、女性語、卑語、方言などの位相語も掲載している点が特筆される。また、全篇ローマ字活字で印刷されていることから、当時の日本語の発音が観察出来るという点でも貴重であり、中世の日本語の様相を窺い知る事が出来る重要な言語資料となっている。

ただし、日葡辞書の記述や用例には、日本資料も含め様々なものが情報源となっており、どのように編纂・記述されたかは、十分に明らかになっていない。また、具体的な編纂者や編纂背景、執筆の手順・方法についても、印刷された版本からのみ想像するしかない状況で

あった。編纂については、序文に、日本語に精通している関係者を中心に、日本人の助力があった事が記され⁷⁾、また、編纂者についても先行研究で検討がなされているが⁸⁾、定説を見ない。同じく序文には、日葡辞書のもととなった辞書があった事が言及されている⁹⁾が、この資料についても、現時点では詳細は不明である¹⁰⁾。

日葡辞書の諸本は次の通りであり、版本が4本、写本が1本確認されている¹¹⁾。

版本：フランス パリ国立図書館本、イギリス オックスフォード大学ボドレイ文庫本、
ポルトガル エヴォラ公共図書館本、ブラジル リオ・デ・ジャネイロ国立図書館
本

写本：ポルトガル アジュダ文庫本

この内、ボドレイ本とエヴォラ本の2本には、本篇の後に補遺篇が付属している。これまで発見されていた日葡辞書は、全て版本か、或いは版本をもとに書き写された写本であったが、今回発見されたトゥールーズ断簡内の資料は、日葡辞書の初の稿本に該当すると考えられる。以下では、原則として、日葡辞書版本を「版本」、トゥールーズ断簡内の日葡辞書稿本資料を「稿本」として表記する。次の画像は、稿本に該当する、トゥールーズ断簡内のNo.01、06、07、08、11の資料である。

7) *alguns dos que melhor sabião a lingua de Iapão, como a ajuda tambem de alguns naturales entendidos nella nos aplicamos com diligencia por alguns annos a examinar, acrescentar, & aprefeioar este Vocabulario*, [そこでわれわれは、日本語をよく知っている者のうち何人かが、日本語に精通している数人の日本人の援助をも得て、この辞書を検討増補して完成するために、数年の間精励して事に当たるようにしたのである。]

8) 土井（1971）では、日葡辞書の編纂者がジョアン・ロドリゲスであった可能性について検討しているが、日葡辞書の記述と大文典の記述とを対照させ、結果、ロドリゲス説の成り立たない事を指摘している。

9) *Agora que com as muitas perseguições desta Christandade vagou algum tempo mais aos Padres, & Irmãos Iapões pera reuer, examinar melhor os Vocabulários, que estão ja ha annos feitos posto que imperfeitamente*. [今日は、キリスト教に対する迫害がひどくて、バアデレや日本人イルマンたちは以前よりも若干の時間的余裕が生じたので、年来不完全ながら存していたこれらの辞書を見直し、一層よく点検する事が出来るようになった。]

10) 森田（1976）は、バレット写本「難語句解」の中の「Namaxij coto.」（p.635）の語とその語釈「couza dura cruel. [無情で残忍な事。]」を取り上げ、「難語句解」の中に写本『日葡辞書』の影響がある事を指摘している。「バレットがFeiqe本文に基づいてNamaxij cotoの1条を立て、その意味を調べるために利用した日葡辞書写本に、今長崎版を見ると同じように、Namaxij に crua と説明してあったのではないか。それを、「生の、未熟な」の意にとらないで「残忍な、残酷な」の意味にとり、後者と同じような意味の duro や cruel を用いて注したのではなかろうか。（p.387）」

11) なお、このアジュダ文庫の写本は版本日葡辞書を書き写したものであり、今回発見された稿本とは性格が異なる。



それぞれの資料の規模と、版本での凡その対応範囲は次の通りである。

- ・ 01 は約 1 折分の原稿。(頭文字 T の部。版本では 245 ～ 251 丁 Qqq ・ Rrr 折、本篇 T 部が主に該当)
- ・ 06 と 08 が同じ丁の原稿。(頭文字 N の部。版本では 368 ～ 369 丁 aa 折、補遺篇 N 部が主に該当)
- ・ 07 と 11 が同じ丁の原稿。(頭文字 X の部。版本では 393 丁 gg 折、補遺篇 X 部が主に該当)

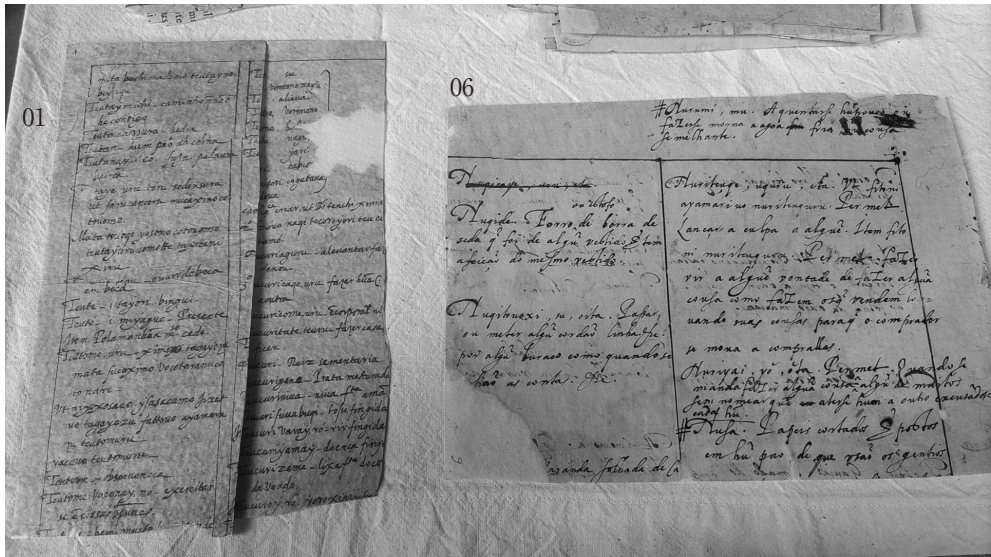
01・06・07・08・11 全体での見出し語は、見出し語の特定が出来ない場合も、項目として存在が確認出来る場合はカウントすると、約 150 項目であり、凡その内訳は 01 が約 90 項目、06・08 が約 40 項目、07・11 が約 20 項目である。但し、先述の通り、語釈の全文がわからない箇所、見出し語部分が欠けており項目の存在は確認出来るものの、語の特定は困難な箇所などもあるため、正確な項目数は不明である。

3.2. 資料毎の差異

3.1 でも述べたように、日葡辞書稿本は [01]、[06・08]、[07・11] と、大きく 3 種の資料に分けられる。これらはそれぞれ特徴が異なっており、稿本の中でも異なった段階の資料であると考えられる。

資料の状態と内容、両方の点で特に大きく異なっているのが、01 と 06 以降の資料である。次の画像にも明かなように、01 と 06 以降の資料とでは、使用されている紙の大きさが大

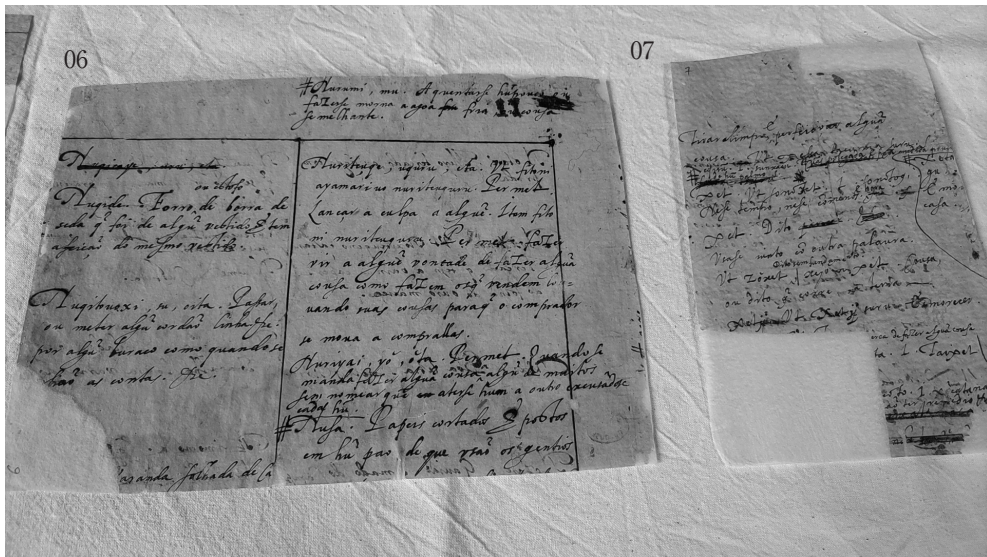
きく異なる。



01は、13.5（上）×19.9（左）のquartoサイズの紙であるのに対し、06は21.0（上）×15.5（右）でfolioサイズの紙が使用されている。紙の質も同様に違いがあり、01の紙は厚手のしっかりとした高級感のある良質紙であるのに対し、06以降は、01と比べると薄手の紙になっている。記事の書き方も、01は項目間に無駄な空白もなく、清書に近い状態の原稿と思われるのに対し、06以降は項目間に空白があったり、本来本文中に記入する項目が欄外に記入されていたりと、01と比較すると、より下書きの状態に近い原稿であると考えられる。

01と06以降とで版本の対応箇所が大きく異なっている事は、先の、各断簡の版本対応箇所で示した通りである。06以降は版本の補遺篇の内容が該当するが、01の見出し語の殆どは、版本本篇に対応する。また、次の3.3でも取り上げるが、06以降の記述に比べ、01の記述は版本と一致はしない。この事からも、01と06以降とは、資料の段階・特徴が異なっていると言える。

06以降の資料についても、矢張り編纂の段階が異なっていると思われる特徴が見出される。



06・08 と 07・11 との間でも、使用されている紙に違いが見られる。特に明らかなのが、07・11 は、06・08 と違い、四方の枠が書き込まれていない点である。本来は、枠が書き込まれている方が清書用の紙であることから、07・11 と比べると、06・08の方が、より清書に近い状態の原稿であると考えられる。また、07・11 は 06・08 よりも紙の質が薄く粗悪であり、文字の書き振りが走り書きのように見える箇所も少なくない。07・11 には、一度書いた記述に線を引いて削除している箇所も多く、06・08 よりも更に下書きの段階の原稿であると推察される。先にも述べた通り、実際には 06・08 も見出し語間の空白や項目の未整理が確認されるため、06・08 も完全な清書原稿には至っていないと思われるが、07・11 はその更に前の段階の草稿と言えるのではないか。

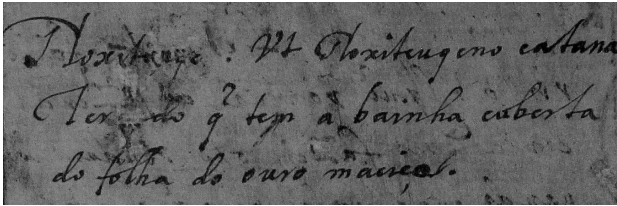
以上のように、資料の状態の観点から見ると、[01]、[06・08]、[07・11] とで資料の段階・性格が異なっていると考えられ、その中でも特に [01] と [06・08、07・11] というように、資料の特徴に違いがあると言える。

3.3. 版本との対照

3.2 では、資料の状態の観点から、稿本 [01]、[06・08]、[07・11] が、それぞれ異なる段階の資料である事、また、06 以降の資料と比べて、01 が特に異なった特徴を持つ資料であるという事を述べたが、これは、01 と 06 以降の資料の中の記述を版本と比較する事で、より明らかになる。

06 以降の、版本補遺と対応する稿本は、見出し語・語釈内容ともに、ほぼ版本の記事と一致する。

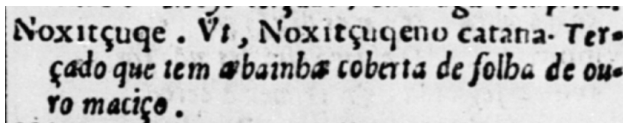
(1)



【稿本 06-01VC01】Noxítçuqe（熨斗付）Vt, Noxítçuqeno catana.（熨斗付の刀）

Terçado q~ tem a bainha coberta de folha de ouro maciço. [純金の延板で覆った鞘の付いている短刀。]

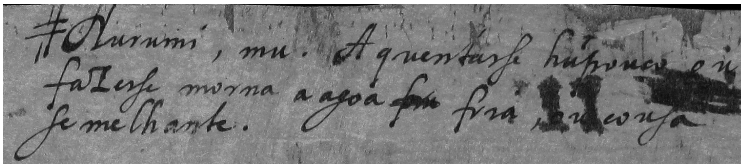
(2)



【版本補遺 368V】Noxítçuqe（熨斗付）Vt, Noxítçuqeno catana.（熨斗付の刀）

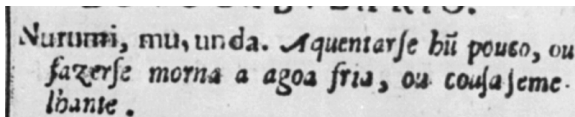
Terçado que tem a bainha coberta de folha de ouro maciço. [純金の延板で覆った鞘の付いている短刀。]

(3)



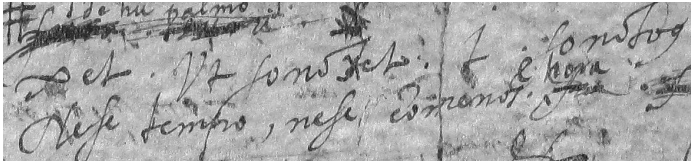
【稿本 06-01RB03 欄外】#Nurumi, mu.（温み、む）Aquentarse hũ pouco ou fazerse morna a agoa [fru] fria, ou cousa semelhante. [冷たい水とかそれに類する物とかが少し温まる、すなわち、なまぬるくなる。]

(4)



【版本補遺 369R】Nurumi, mu, unda.（温み、む、んだ）Aquentarse hũ pouco, ou fazerse morna a agoa fria, ou cousa semelhante. [冷たい水とかそれに類する物とかが少し温まる、すなわち、なまぬるくなる。]

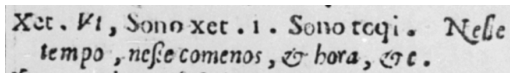
(5)



【稿本 07-01R03】 Xet. (節) Vt (例) sono xet. l. sono toqi, (その節 または その時)

Nesse tempo, nesse cōmenos e hora. [その時期に、その場合に、その時刻に。]

(6)

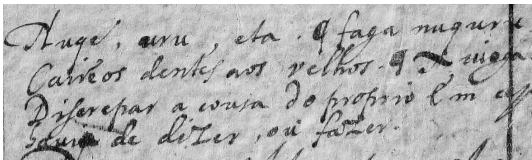


【版本補遺 393R】 Xet. (節) Vt (例) sono xet. l. sono toqi, (その節 または その時)

Nesse tempo, nesse comenos, & hora, &c. [その時期に、その場合に、その時刻に、など。]

06 以降で、見出し語の判別が可能な範囲では、55 項目中 53 項目は版本と一致しており、語釈も、記述が大きく異なる例はない。但し、中には 06 以降の稿本の中でも、語釈の記述が版本と若干異なっている例や、最初に書いた語釈が修正された跡が確認出来る例も存在する。

(7)

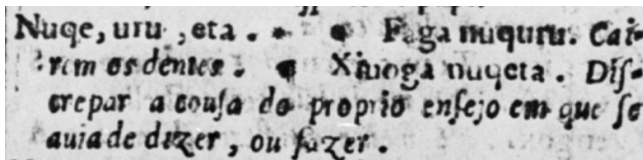


【稿本 08-01RB05】 Nuqe, uru, eta. (抜け、くる、けた) ¶ faga nuquru. (歯が抜くる。)

Cairẽ os dentes aos velhos. (老人の歯が抜ける。) ¶ Xiuoga [...] (潮が...)

Discrepar a cousa do proprio em cejo haui de dizer, ou fazer. [物事が、それを言ったりしたりするちょうどよい時期 (潮時) を外れる。]

(8)

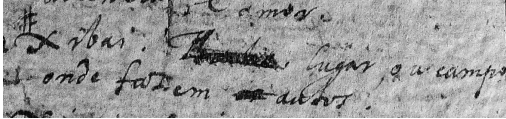


【版本補遺 369R】 Nuqe, uru, eta. * (抜け、くる、けた) ¶ Faga nuquru. (歯が抜くる)

Cairem os dentes. [歯が抜け落ちる。] ¶ Xiuoga nuqeta. (潮が抜けた) Discrepar a cousa do proprio ensejo em que se auia de dizer, ou fazer. [物事が、それを言ったりし

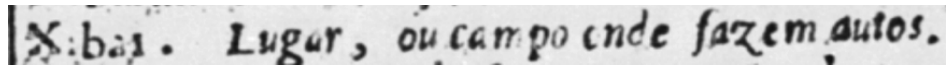
たりするちょうどよい時期（潮時）を外れる。]

(9)



【稿本 07-01V03】 # 1. Xibai. (芝居) {- Theatro [演劇] -} lugar, ou campo onde fazem {- os -} autos. [演劇を行なう所、または、屋外の演技場。]

(10)

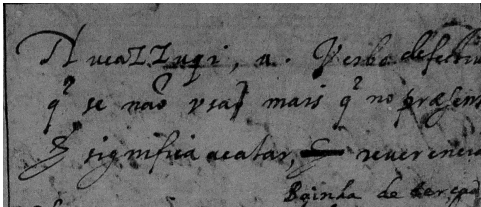


【版本補遺 393V】 Xibai. (芝居) *Lugar, ou campo onde fazem autos.* [演劇を行なう所、または、屋外の演技場。]

「Nuqe, uru, eta. (抜け、くる、けた)」の例は、稿本の「aos velhos (老人の)」という限定を版本では除いた例であると考えられる。また、「cejo」と「sejo」など、表記の上での異同は確認出来る。「Xibai. (芝居)」の例は、稿本を見るに、当初「Theatro [演劇]」としていた語釈（対訳）を変更し、変更後の記述が版本でそのまま採用されたものと推測される。

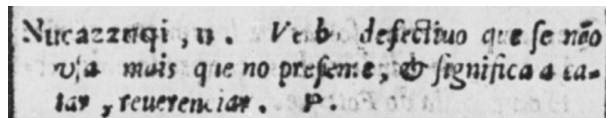
また、語釈の掲出形について、稿本の例外的な記述が、そのままに版本に採用されてしまったと思われる例も確認される。

(11)



【稿本 06-01VC04】 Nucazzuqi, u. (額づき、く) Verbo defectivo q~ se não vsaõ mais q~ no praesent [...] E significa acatar, {-e-} reuerencia [...] [現在形以外では用いられない欠如動詞。敬う、崇め尊ぶ、の意。]

(12)



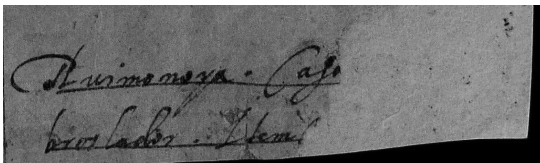
【版本補遺 369R】 Nucazzuqi, u. (額づき、く) *Verbo defectivo que se não usa mais que no presente, & significa acatar, reuerenciar. P.* [現在形以外には用いられない欠如

動詞。敬う、崇め尊ぶ、の意。詩歌語。]

版本日葡辞書は、動詞見出し語を立項する際、原則として、過去形を含めた三形を示すがこの「Nucazzuqi, u. (額づき、く)」の例では、過去形の「額づいた」が立項されていない。稿本 06 以降でも、基本的には動詞見出し語を立項する際に過去形を伴っているが、ここでは落としてしまっている。恐らく、稿本で過去形を落として記述してしまったものが、そのまま版本で採用されてしまったものと推察される。

なお、稿本と版本で一致しない見出し語の中には、版本で補遺篇ではなく本篇に立項されている語も含まれている。

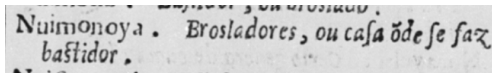
(13)



【稿本 06-01VD01】 Nuimonoya. (縫物屋) Casa [...] broslador. [刺繍をつくる家。]

Item. [...] [同。…]

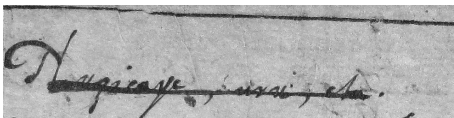
(14)



【版本本篇 187V】 Nuimonoya. (縫物屋) Brosladores, ou casa ôde se faz bastidor. [刺繍をする人、または、刺繍を作る家。]

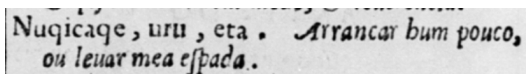
この「Nuimonoya.」の例は、上の画像でもわかる通り、稿本では線が引かれており、削除しているようにも見える。同じように線が引かれている語に、次の「Nuqicaqe」の例もあるが、これは稿本では語釈も書かれておらず、明らかに削除されている語である。

(15)



【稿本 01-02VD07】 Nuqicaqe, uru, eta. (抜き掛け、くる、けた)

(16)

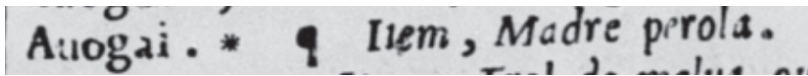


【版本本篇 187V】 Nuqicaqe, uru, eta. (抜き掛け、くる、けた) Arrancar hum pouco, ou leuar mea espada. [刀を少しばかり抜く、または、半ば抜いて待つ。]

これらの2語は、ともに、稿本の補遺篇の原稿と思われる箇所には一度は記載されているものの、線が引かれ、削除したと思われる点、そして、版本では補遺篇ではなく本篇で同じ語の立項が見られる点が共通する。このことから、稿本執筆の際、既に本篇に立項されている語について、誤って重複して立項してしまい、それに気づき、立項を削除した例なのではないかと推察される。

実際に、版本の補遺篇でも、本篇と重出して立項されている見出し語が存在する。その中の殆どは意図した重出であり、版本の見出し語に「*」の記号が付されている語は、本篇と重出して補遺篇に立項している事を示している¹²⁾。

(17)



【版本補遺 333V】Auogai. (密石) * ¶ Item, Madre perola. [また、真珠貝。]

(18)

【版本本篇 15V】Auogai. (密石) *Obra feita de pedacinhos de cascas de ostras pegados com vruxi.* [牡蠣殻の小片を漆で貼りつけて作った工芸品。]

これは、版本の語釈に示した「工芸品」という意味に加えて、補遺篇で「真珠貝」という意味を示している例である。こうした補遺での重出の例は、原則として、本篇の記述を踏まえて補遺篇で加筆修正をするものである。

しかし、中にはこの重出を示す「*」を持たずに重出している例も存在している。こうした例の中には、本篇と補遺篇とで語釈が完全に一致するような例や、語釈文は異なるものの補遺篇よりも本篇の方が詳しい語釈を持ち、補遺での加筆修正の機能を持つとは思われない例も含まれており、意図しない重出の例であると考えられる（中野（2017））。

(19)

【版本本篇 007V】Amagasa. (雨傘) *Sombreiro grande pera a chuua.* [雨を避けるための大きな傘。]

(20)

【版本補遺 332V】Amagasa. (雨傘) *Sombreiro grande pera a chuua.* [雨を避けるための大きな傘。]

12) 本篇の序文にも次のようにある。*Aduirta o leitor que esta estrellinha * nos lugares onde se achar, significa, que aquellos vocabulos posto que estão impressos no corpo do Vocabulario, todavia ou se lhes acrescenta algum outro sentido, ou se emmenda nelles alguma cousa, ou se declara melhor.* [読者は次のことに注意されたい。見出し語の所々に見られる星印*は、その語がこの辞書の本篇にも印刷されているけれども、それにほかの或る意味を付け加えるか、或ることをさらに追加するか、あるいは、説明を改め直すかしたものである。]

(21)

【版本本篇 316V】Yadoriqi. (栖木) *Aruore que naturalmente sem ser ãxertada nace no tronco, ou ramo de outra.* [接木したのではなくて、自然にほかの木の幹や枝に生ずる木。]

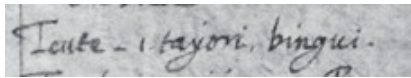
(22)

【版本補遺 398R】Yadoriqi. (栖木) *Aruore assi chamada.* [このように呼ばれる木。]

こうした例は意図しない重出、つまり、本篇で既に立項している事が見落とされて補遺篇に誤って立項してしまった例であると考えられる。稿本の中の、線によって消されている見出し語は、意図しない重出が稿本の記述に紛れ込んでしまった例を削除したものなのではないか。こうした記述の痕跡からも、稿本 06 以降の資料が版本補遺篇の草稿と考えるのに矛盾はないであろう。

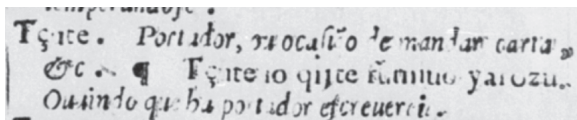
ここまでは 06 以降の、記述内容が版本補遺篇とはほぼ一致する例を挙げた。若干の例外はあるものの、その殆どは補遺篇の記述と一致し、06 以降の資料と版本補遺篇とが、資料として近い関係にあるものと言える。一方、稿本 01 を見ると、見出し語は共通するものが多いが、語釈記述については、版本とは殆ど一致しない。

(23)



【稿本 01-01RA08】Tcute (伝) i. tayori, bingui. (便り、便宜)¹³⁾

(24)



【版本本篇 251R】T çute (伝) *Portador, ou ocasião de mandar carta, &c.* [書状などを持たせてやる使いの者、または、それを送るよい機会。]

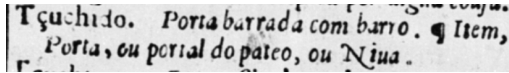
(25)



【稿本 01-02RA07】Tcuchido. (土戸) *Porta de terra* [土の戸]

13) 版本では見出し語 Bingui. (便宜) に i. Tayori. (便り) とある。

(26)

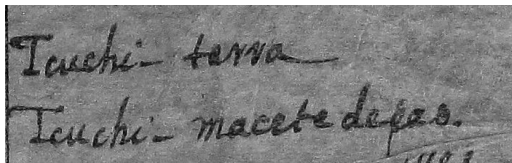


【版本本篇 245V】 T çuchido. (土戸) *Porta barrada com barro.* [泥塗りの戸。]

¶ *Item, Porta, ou portal do pateo, ou Niua.* [また、中庭や庭の戸、または出入口。]

06 以降のように語釈が完全に一致する例は僅かではあるが、稿本の記述が版本の記述の中に組み込まれているような例は少なくない。例えば次のような例は、稿本の記述が版本の記述の一部になっている例である。

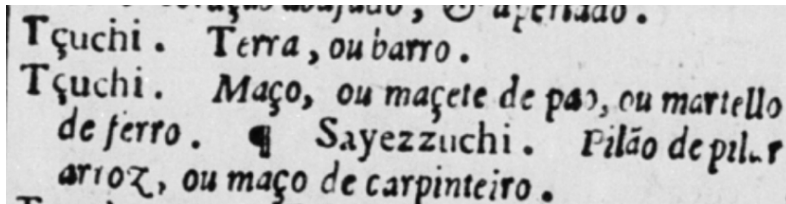
(27)



【稿本 01-02RA04】 Tcuchi. (土) terra [土。]

【稿本 01-02RA05】 Tcuchi. (槌) macete de pao. [木製の小槌。]

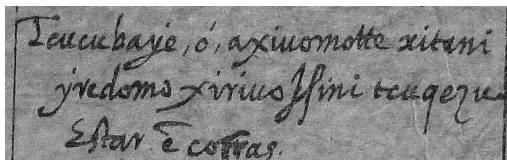
(28)



【版本 245C12】 T çuchi. (土) Terra, ou barro. [土・土地、または、泥・粘土。]

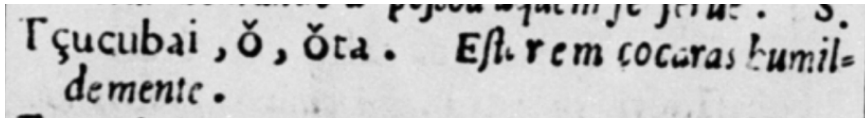
【版本 245C13】 T çuchi. (槌) *Maço, ou maçete de pao, ou martello de ferro.* [木製の槌や細工用の小槌、または、鉄槌。]

(29)



【稿本 01-02RA08】 Tcucubaye, ô, (つくばへ、ふ) axiuomotte xitani yredomo xiriuo jini tcuquezu. (足をもって下にいれども尻を地に着けず) Estar e coc [a] ras. [身がかがめる。]

(30)



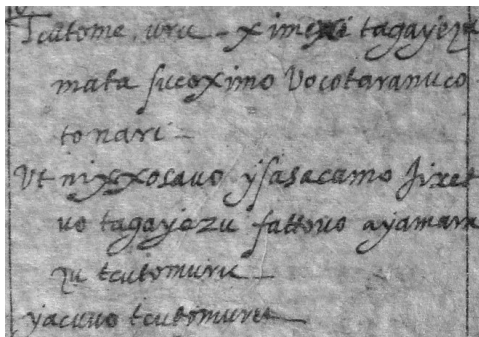
【版本 245V】 T çucubai, õ, õta. (つくばひ、ふ、うた) *Estar em cocaras humildemente.*

〔かしこまって身をかがめる。〕

これらはいずれも、版本の記述が稿本よりも詳しくなっている例であると言える。

また、稿本 01 はポルトガル語語訳を持たず、日本語による説明のみの項目も見える。
例えば、次のような例である。

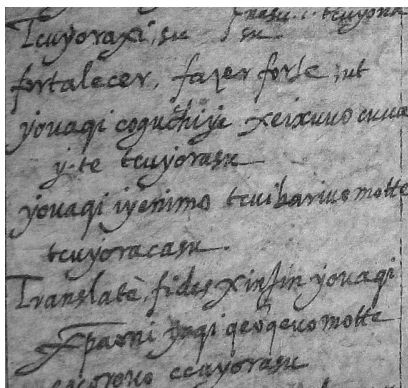
(31)



【稿本 01-01RA11】 Tcutome, uru (勤め、むる) Ximexi tagayezu mata sucoximo vocotaranu coto nari. (しめし違えず、又少しも怠らぬ事也。) Vt, nixxosauo ysasacamo jixetuo tagayezu fattouo ayamarazu tcutomuru. (日所作を些かも時節を違えず法度を誤らず勤むる。) yacuuo tcutomuru (役を勤むる)

「Translatè, (転じて、転義)」の注記を持つ、ポルトガル語訳を持たない日本語のみの箇所も確認される。

(32)



【稿本 01-01V01】 Tcuoraxi, su (強らし、す) fortalecer, fazer forte, [補強する、強くする] ut youaqi coguchiye xeixuuu cuuaý [e]te tcuoraxu. (弱き虎口に精衆を加えて強らす。) youaqi iyenimo tcuibariuo motte tcuoracatu. (弱き家にも付い梁を以て強らかす。) Translatè, [転義] fides xinjin youaqi Xpāoni yoqi qeðqueuo motte cocorouo ccuoraxu (ヒイデス信心弱きキリシタンに良き教化を以て心を強らす。)

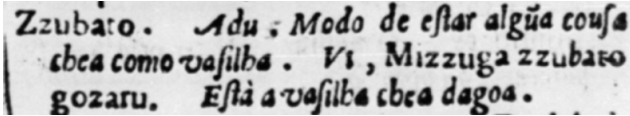
この他、版本と同語別形(清濁の違い)の語が稿本に立項されている例も見え、同語別形の見出し語選択の編纂過程の痕跡を示すものとも考えられる。

(33)



【稿本 01-02VD04】 Tcufato. (つはと) adv [...] 副詞 [...]

(34)



【版 本 本 篇 329V】 Zzubato. (づばと) *Adu. Modo de estar algũa cousa chea como vasilha.* [副詞。容器などに物が一杯に満ちているさま。] *Vt, Mizzuga zzubato gozaru.* (水がづばと御座る) *Està a vasilha chea dagoa.* [容器が水で一杯になっている。]

稿本 01 と 版 本 の 見 出 し 語 自 体 は 多 く 一 致 す る 事 や、語 積 の 類 似 性 が 見 出 さ れ る 事、同 語 別 形 の 見 出 し 語 が 含 ま れ て い る 事 か ら も、稿 本 01 が 版 本 の 原 稿 と 無 関 係 と も 言 い 難 い。但 し、先 に 示 し た よ う な 06 以 降 の 資 料 ほ ど の 一 致 は 見 ら れ な い。

こ の よ う に、版 本 と 稿 本 と の 対 照 結 果 も、3.2 に 示 し た、01 と 06 以 降 の 資 料 と で 大 き な 違 い が あ る と い う 指 摘 と 矛 盾 し な い。3.2 と 3.3 で 示 し た 資 料 の 状 態 と 記 述 内 容 か ら、[01]、[06・08]、[07・11] は、そ れ ぞ れ、別 の 段 階 の 稿 本 で あ る と 考 え ら れ る。ま た、そ の 中 で も 特 に、[01] と [06・08、07・11] と の 間 で、資 料 の 特 徴 が 大 き く 異 な っ て い る と 言 え る。そ れ ぞ れ の 特 徴 を ま と め る と、次 の よ う に な る。

・[01] は 最 も 良 い 状 態 の 資 料 で あ り、紙 の 質 が よ く、原 稿 の 書 き 振 り も 整 っ た、清 書 状 態 に 近 い よ う に 見 え る も の で あ る。記 述 に 見 ら れ る 見 出 し 語 は、版 本 の 本 篇 に 対 応 す る 場 合 が 多 い が、語 積 に つ い て は 一 致 す る 例 は 少 な く、06 以 降 と 比 べ て も 別 の 段 階・種 類 の 資 料 で あ る よ う に 見 え る。

・[06・08] は、[01] より は 紙 の 質 が 劣 り、原 稿 の 状 態 も ま だ 下 書 き の よ う に 見 え る。一 方 で、本 来 清 書 用 に 用 い ら れ る よ う な 四 方 の 枠 が 記 入 さ れ て い る 紙 に 書 か れ て お り、[07・11] より は 紙 の 質 も 良 く、文 字 の 書 き 振 り も 読 み や す く 整 っ て い る。記 述 内 容 は、版 本 の 補 遺 篇 に ほ ぼ 対 応 す る。

・[07・11] は 最 も 紙 が 薄 く、文 字 も 走 り 書 き の 状 態 で 読 み に く い。[01] や [06・08] に 見 ら れ る よ う な 四 方 の 枠 も な く、清 書 用 の 紙 も 使 用 さ れ て い な い 事 が わ か る。今 回 の 資 料 の 中 で は、最 も 下 書 き に 違 い 段 階 の 資 料 で あ る と 考 え ら れ る。記 述 内 容 は、[06・08] 同 様、版 本 の 補 遺 篇 に ほ ぼ 対 応 す る。

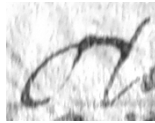
3.4. 字形のバリエーションについて

稿本の記述は、日葡辞書の編纂背景や記事の順番・タイミングの検討材料になると言えるが、まず稿本の記述で特筆される点の一つに、複数の字形が見られる事が挙げられる。特にそれが明らかなのが、稿本 06・08 に見られる大文字 N の字形である。N の字形は、06・08 の中で、大別して 3 種見られる。

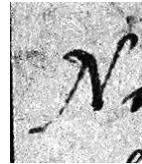
(35) 字形 a



(36) 字形 b

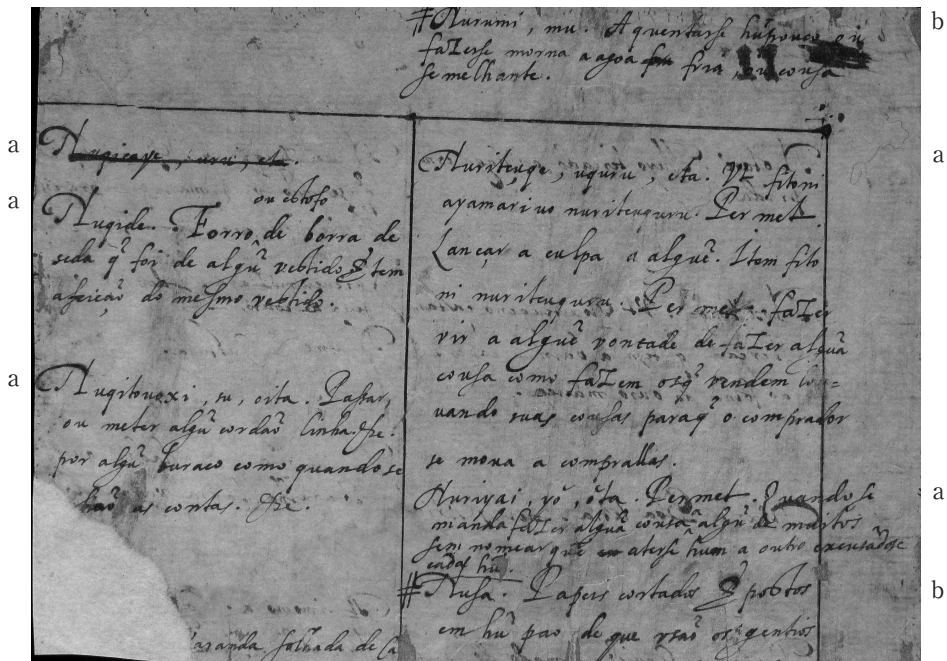


(37) 字形 c

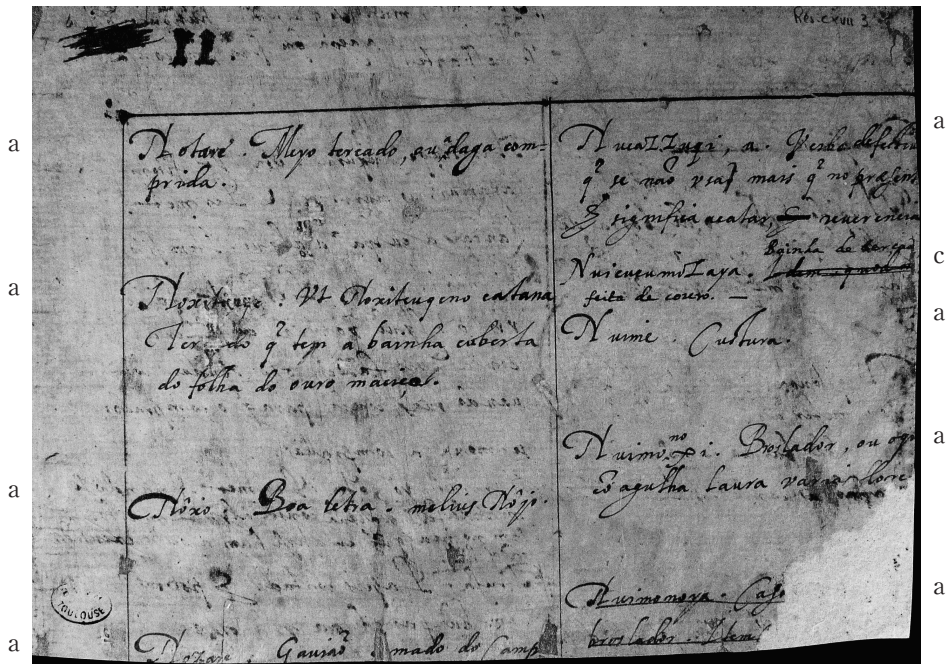


06・08 では、合計 34 回大文字 N が用いられるが、この内、最も多く使用されているのが字形 a の 25 回、その次に字形 b の 8 回となる。字形 c は、1 例のみであり、唯一、「Nuicucumizaya. (縫ひ含み鞆)」の「N」でのみ使用されている。字形 a が、字形 b・c と比べて使用頻度が高く、主に用いられていた字形であると言える。次の 06・08 の画像からも、a が最も多く用いられている事は明らかである。

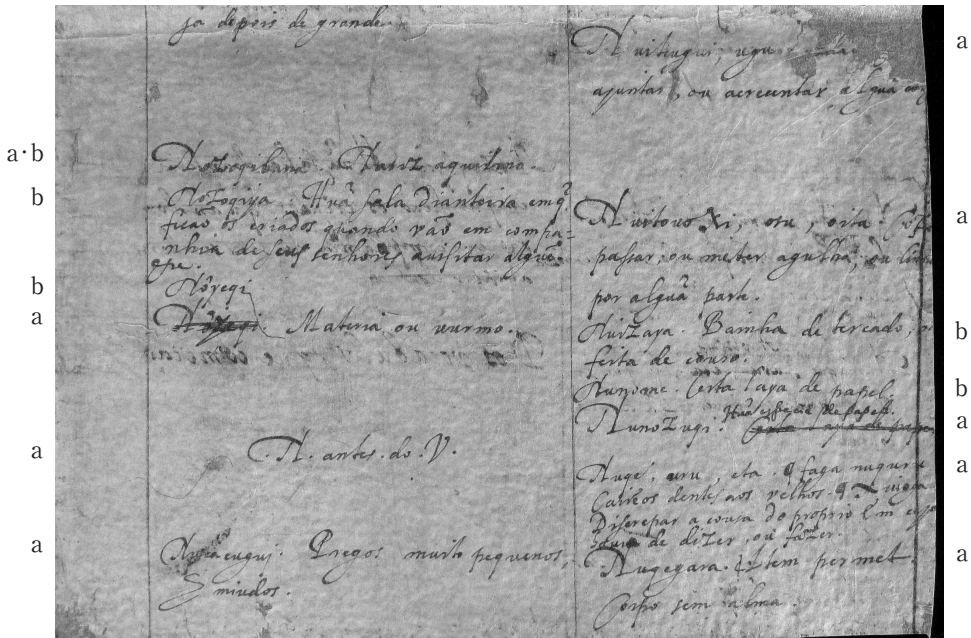
・ 06R



・ 06V



・ 08V

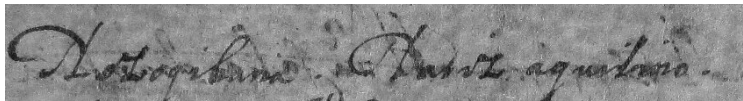


字形 a だけを見ると、一部の例外もあるが、殆どの見出し語の間隔がほぼ均等に 2 ～ 3cm となっている。また、「N. antes do V.」のような、見出し語配列についての記述の際の「N」の字形も、字形 a である。先述のように、字形 a の使用例が最も多いという事も踏まえると、字形 a の見出し語は、最初に書かれた見出しである可能性が高い。先に書かれた字形 a の見出し語の間に、字形 b が書かれているように見える。字形 c も、先述の通り「Nuicucumizaya.」の 1 例のみであるが、この例も、書かれている記事の位置からすると、字形 a の見出し語「Nucazzuqi, cu.」と「Nuime.」の記述の間に挿入されたものと推察される。

こうした事から、見出し語・語釈の記述が複数のタイミングにわたって行われていた可能性が考えられる。続く見出し語の同じ頭文字を、同じタイミング書いてわざわざ字形を変え理由は見出しにくい。すなわち、項目間で空白を確保しながら字形 a の見出し語が書かれた後に、字形 b や字形 c の語が字形 a の見出し語の間に挿入されたと見る事が出来る。

但し、見出し語頭文字の N と語釈冒頭の頭文字 N とで、字形が異なっている例が 1 例だけ存在している。

(38)



【稿本 08-01RA01】 Nozoqibana. (視鼻) Nariz aquilino. [鷲鼻.]

この箇所では、見出し語頭文字の大文字 N は字形 a であるのに対し、語釈冒頭の大文字 N は字形 b となっている。そもそも 06・08 内の語釈冒頭で、見出し語の頭文字でもある N が使用される例がここしか確認出来ないため、他との比較は出来ず詳細は明らかに出来ないが、見出し語と語釈を書くタイミングが異なった例であるかもしれない。

また、字形が複数種ある事が、そのまま記事執筆者が複数存在した事を示すものではないものの、一筆であったとも断じる事は出来ない。少なくとも、字形が複数種存在していた事、その中で使用頻度に差がある事は、見出し語・語釈記述の順序を検討する材料となり得るであろう。

3.5. 訓釈の脱落について

3.3 で指摘したように、日葡辞書稿本 06 以降の資料の記述の殆どは、版本補遺篇と一致するが、版本にはあり稿本では脱落している記述が、訓釈である。

訓釈は、版本の中で使用される、見出し語の漢字表記示唆の機能を持つ注記である（中野

(2018))。例えば、次のような例である。

(39) 【版本 3R】Acqi. (悪鬼) Axij voni. (悪い鬼) *Diabo peruerso*. [「邪悪非道な鬼。」]

(40) 【版本 106V】Fudô. (不動) Vgocazu. (動かず) *Não se mouer*. [「動かない事。」]

このように、見出し語の構成漢字の字訓（原則として、定訓）を用い、語義と語構成に即した句の形式で、見出し語の漢字表記を示す。稿本 06 以降の見出し語の中で、版本での対応箇所、訓釈が使用されている見出し語が 08 に 1 例、11 に 2 例存在する。次に示す、版本引用の下線部が訓釈に該当するが¹⁴⁾、稿本では、同じ見出し語についての記述の中で、訓釈だけが落ちている。

(41)

Nôyeqi. Vmi, xiru. *Materia, ou uurmo.*

【版本補遺 368V】Nôyeqi. (膿液) Vmi, xiru. (膿、液) *Materia, ou uurmo.* [「膿汁、あるいは、血汁。」]

(42)

Nôyeqi. *Materia, ou uurmo.*

【稿本 08-01RA03】Nôyeqi. (膿液) *Materia, ou uurmo.* [「膿汁、あるいは、血汁。」]

(43)

【版本補遺 393R】Xexe. (世々) l. Xeje. (世々) Yo, yo. (世、世) i. *O tornar a nacer no outro mundo com outra figura.* [「姿形を変えて他の世に生まれ変わること。」]

(44)

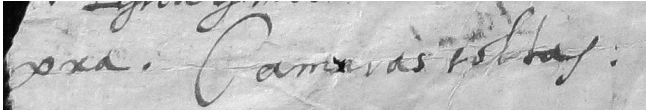
O tornar a nacer no outro mundo com outra figura.

【稿本 11R03】[...] [x]e, Xeje (世々、世々) Tornar a [...] no outro mundo com [...] figura [「別の生に別の形で...」]

14) 「膿」「液」ともに、『落葉集』には掲載がないが、版本本篇の中でも【185V】Nôqet. (膿血) Vmi, chi. (膿、血)、【193V】Qetyeqi. (血液) Chi, xiru. (血、液)などの用例があり、それぞれ漢字表記と定着している読みであると推察される。「泄」「瀉」も同様に、『落葉集』に見えず、「瀉」は版本本篇の方に訓釈の用例【265V】Toxa. (吐瀉) Faqi, cudasu. (吐き、瀉す)が見えるが、「泄」の字はここの一例のみである。

- (45) 【版本補遺 393R】 Xexxa. (泄瀉) Mori, cudaru. (泄り、瀉る) *Camaras soltas.* [締まりのない下痢。]

(46)

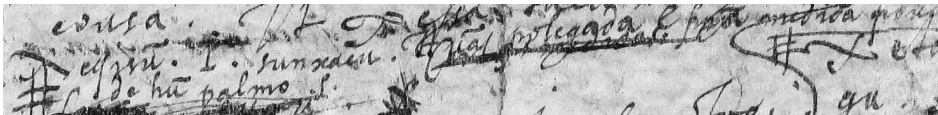


【稿本 11R06】 [...] xxa. ((泄)瀉) *Camaras soltas.* [締まりのない下痢。]

これらの例は稿本 08 と 11 に見られる例であり、ここまで述べてきたように、08 と 11 は別の段階の資料と考えられるが、両方の資料でともに訓釈が落ちているのがわかる。訓釈以外は、用例や日本語注記も、原則として版本と稿本は一致している。訓釈だけが、稿本で落ちているという事になる。

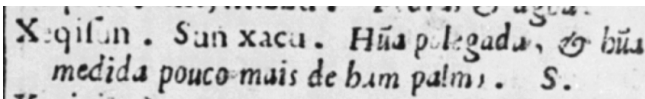
なお、次に示すように、1 例だけは版本で訓釈とも思われる注記が、稿本で書かれている例があるが、稿本では「i. (id est/すなわち)」を伴って使用されており、当初は「i.」による日本語注記として書かれていたものが、「i.」が落ちてしまって版本では訓釈のように見える注記になった可能性も考えられる。

(47)



【稿本 07-01R01】 # Xeqisũ. (尺寸) i. sunxacu. (寸尺) *Hũa polegada, & hũa medida pouco mais de hũa palmo.* S. [1 polegada (一寸) と、1 palmo よりも少し長い尺度 (一尺)。文章語]

(48)



【版本補遺 393R】 Xeqisun. (尺寸) Sun xacu. (寸尺) *Hũa polegada, & hũa medida pouco mais de hum palmo.* S. [1polestada (一寸) と、1palmo よりも少し長い尺度 (一尺)。文章語]

訓釈が稿本の中に書かれていないのは、訓釈が準備されるタイミングが、見出し語や語釈よりも後であった可能性と矛盾しない。先述の通り、訓釈は見出し語の字訓、特に定訓を用いるため、必然的に、見出し語が確定した上で準備される事になる。また、訓釈で用いられる字訓は、見出し語の語義に即して選択されていると思われる。例えば、次のような訓釈が

それに該当する。

- (49) 【版本本篇 216R】Saimit. (細密) Comacani qibixij. (細かに密しい) *Cousa miuda, & rigurosa*. [細かで厳密な事。]
- (50) 【版本本篇 19R】Baijit. (梅実) Vmeno mi. (梅の実) *Fruita de aruore como amexieira*. [梅の木の实。]

定訓の参考となる、キリシタン版漢字辞書『落葉集』(1598)によれば、「細」「密」の定訓は「ほそし」「ひそか」であり、「細密」の訓釈は「ほそくひそかなり」であっても問題はない。しかしここでの訓釈は、「こまかにきびしい」となっている。これは、語釈の「*Cousa miuda, & rigurosa*. [細かで厳密な事。]」を踏まえての訓釈の設定であると考えられる。次の「梅実」の「実」も同様である。「実」の落葉集定訓は「まこと」であるが、ここで「うめのまこと」としては意味が通らないため、定訓以外の字訓である「み」を採用している。

このように、訓釈は見出し語だけではなく、その語義を踏まえて準備されていると言える。つまり、見出し語・語釈の後に準備されていると考えるのが自然である。稿本の記述で訓釈だけが落ちているという事は、こうした訓釈の準備に必要な情報を鑑みても矛盾しない。

また、版本補遺篇の訓釈を観察すると、版本本篇の原則に反する次のような例も見られる。

- (51) 【版本補遺 373V】Ranpi. (乱飛) Vt Ranpi ranguai. (乱飛乱外) Midare,tobu, midare, foca. (乱れ、飛ぶ、乱れ、外) *i, Cair de mistura, ou de romania. S.* [列をくずして入りまじり、乱れながら飛ぶ事。文書語。]
- (52) 【版本補遺 375R】Riûgûcai. (竜宮海) Tatçu, miya, vmi. (竜、宮、海) *i, Reino dos lagartos, que està de baixo do mar: como fingem os gentios.* [ゼンチヨ (異教徒) の想像しているところによれば、海底にある竜。]
- (53) 【版本補遺 394R】Ximot. (私物) Vatacuxi, mono. (私、物) *Cousas proprias*. [自分の物。]

これらの例は、いずれも本篇の訓釈の原則に反する。(51)は、訓釈に該当する注記が見出し語に対してではなく、見出し語の後の用例(Vt)の四字熟語に対して付されており、更に、その訓釈も句の形式を採っておらず、ただ構成漢字の字訓を列挙しただけのものとなっている。(52)と(53)も同様で、見出し語の構成漢字の読みを列挙しているだけである。本篇の原則に沿うのであれば、「竜の宮の海」や「私の物」というように、助詞の挿入が期待される。

補遺篇に見られる原則に反する訓釈の例は、補遺篇では、本篇ほど訓釈を整えるだけの余裕がなかったという、当時の編纂背景を思わせる。こうした事からも、訓釈は日葡辞書の語釈の中で、後に準備された可能性が考えられ、稿本で訓釈が落ちている例の存在とも矛盾しない。稿本で訓釈が落とされているのは、訓釈が見出し語や語釈といった、他の記述が準備

された、その後に用意された注記である事を示しているだろう。また、稿本 11 の段階だけでなく、それより後の段階の原稿と思われる 06 の段階でも、訓釈はまだ十分に整備されていなかった可能性があり、より清書に近い段階で原稿に挿入された注記であるという事が、今回の資料から明らかになったと言える。

3.6. 日葡辞書稿本のポルトガル語の音韻・表記の特徴

3.6.1. s/ç 弁別の不在

日ポ断簡のポルトガル語には、s/ç の音韻弁別が無い。

3.6.1.1 s/ç 弁別と *s beirão* (ペイラの s)

現代のポ語（ポルトガル本国方言）には、*s beirão*（ペイラの s）と呼ばれる音韻論的な現象がある。

16 世紀以前のポ語には、*ś* (apical s) / *ç* (dorsal s) / *ž* (apical z) / *z* (dorsal z) の 4 種対立があった。現在この 4 種の弁別を保持するのは、北東（Magalhães 等）方言だけと言われ、他の方言では、*ś* / *ç*・*ž* / *z* がそれぞれ一音素に合流した S/Z の対立となり、*ç* (dorsal s) / *z* (dorsal z) と両方とも dorsal になったリスボン・ポルト等の方言と、*ś* (apical) / *ž* (apical) と両方とも apical に変化した一部の北部方言に分かれている。この、S/Z のどちらも apical の *ś* / *ž* 2 種対立になった状態を、*s beirão*（ペイラの s）と呼ぶ。

s beirão の要約は、Teyssier (1982 2ed.) p.50-51 にある。

	Predorsodentais	Ápico-alveolares
Surdas	/s/ escrito ç, e c antes de e e i ex.: paço	/ś/ escrito s- e -ss- ex.: passo
Sonoras	/z/ escrito z ex.: cozer	/ž/ escrito -s- ex.: coser

Há então em Portugal de hoje três áreas:

- Centro-Sul* (português comum): confusão das predorsodentais e das ápico-alveolares em favor das predorsodentais;
- Zona intermédia do Noroeste-Centro-Leste*: a mesma confusão, mas em favor das ápico-alveolares («s beirão»);
- Zona arcaica do Nordeste*: conservação dos quatro fonemas primitivos.

	前舌歯音	舌尖歯茎音
無声	/s/ 表記は ç、e・i の前では c 例：paço（宮廷）	/ś/ 表記は語頭で s、語中は ss 例：passo（歩み）
有声	/z/ 表記 z 例：cozer（煮る）	/ž/ 表記は語中で s 例：coser（縫う）
現在のポルトガルは3領域である。 a) 中央から南（標準語） dorsal が apical を吸収 ś / s → s、ž / z → z b) 北東から中央・東の間 apical が dorsal を吸収 ś / s → ś、ž / z → ž (<i>s beirão</i>) c) 古態保存の北東部 ś / s / ž / z の古来の弁別を維持		

s beirão の語は、より狭義に、音声学的に、ś (apical s) 音だけを指す事があり、これは、同じく apical s として有名な *s Madrirena* (マドリードの s) という呼称に似るが、*s beirão* という呼称は、音韻論的対立の解消全体を指すのが本義である。

ś (apical s) は、表記は語頭は s、語中で ss であり、同一環境には立たないので、表記上は ss/s の対立は無い。

apical s (ss) / dorsal s (ç) の対立例の表記は、*cassar* (破棄する) / *caçar* (狩する) 等。尚、語中では、表記上の s は z。例：caça [casa] (狩) / casa [caza] (家), caçar [casar] (狩する) / casar [cazar] (結婚する)。

Bragança 市 *Outeiro* 地区の *s beirão* の音は、次から聴ける。

1. <http://cvc.instituto-camoes.pt/hlp/geografia/som4.html> 音源 1:35 あたりから Mas antigamente, sabia mesmo bem essa carne gorda. Com uma salada e pão de centeio, era mesmo boa (sabia, essa, salada の s が区別無く apical ś)
2. <http://cvc.instituto-camoes.pt/hlp/geografia/som5.html>
aqui assim nesta mesa, ... E depois vai-se com uma brasa, punha assim em cima do unto e ficava aquilo mais teso (mesa, brasa, teso の母音間の z が、区別無く apical ž)

ś (apical) は *chamar* などの j と衝突しそうだが¹⁵⁾、北東部方言には、*chamar* などを tɟamar とする破擦音が保持されて、両者が衝突しない体系も存続する。

15) 自身が *s beirão* の話者である Carlos Assunção 博士 (ポルトガル Trás-os-Montes e Alto Douro 大学教授) には、ś は “chamar” の ch、“debaixo” の x と同じに聞こえるとの事。

Duas Igrejas, Miranda do Douro, Bragança

MADISON (ポルトガル方言音声地図) の
1990 年録音: [http://teitok.clul.ul.pt/madison/
index.php?action=file&cid=ALEPG_Duas%20
Igrejas_4&cql=](http://teitok.clul.ul.pt/madison/index.php?action=file&cid=ALEPG_Duas%20Igrejas_4&cql=)
1:29 あたりから

Pois, al para acá i al para alhá, chamaba-se:
“Olha, ua mão de semente.” *Apois, às bezes,*
inda nun se tinha acabado d’ arar i dízen: “Bota
mais ua mão de semente.”

chamaba [tʃamaba], *semente* [femente]。

尚、この地方は b / v 対立が無く (これも北東
部方言の特徴)、*chamaba* はリスボン方言の
chamava、*às bezes* は *às vezes*。

現代の分布は、Álvarez Pérez (2014) に詳しい。
この論文が、Cintra’s proposal として対照してい
る 1970 年代の分布は、Cintra (1971) である。

20 世紀末の音声は、リスボン大学 MADISON (ポルトガル音声地図 [http://teitok.clul.
ul.pt/madison/](http://teitok.clul.ul.pt/madison/)) から聴く事が出来る。

3.6.2. 日ポ断簡のポルトガル語が、s/ç を混同する例

1) 11V02

Xibiribari [...] シビリバリ

taruru. *Mijars*[e] [...] タルル (排尿する)

¶ *item per met.* (比喩的用法、

muito escaço q ~ escaç [...] 余りにケチで、

se alcança delle huã [...] 何一つ出さ [ない] …)

これは、版本 DJ393C14S (gg3V)

Xibiribari ¶ *Item per met. Se diz de homem muito escaso, que escasamente se
alcança delle huã cousa.* (比喩的用法。ケチで何一つ出さない様な人物の形容)

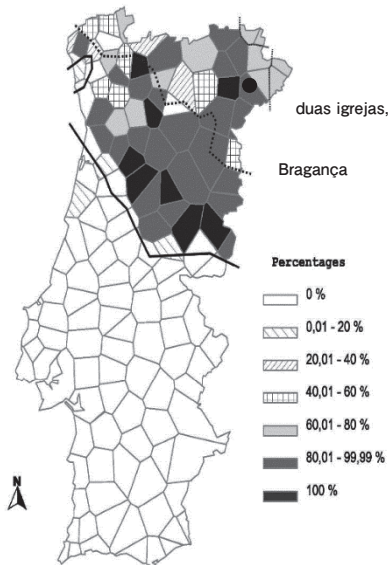
で、*escaso* (吝嗇、現代綴り *escasso*) を *escaço* とした、s/ç の混同。

2) 11R04

[...] gui. Cano de immundi[s?] [c] *ias …ギ。(汚水の管)

ここは、s を c で上書き訂正した様にも見える。

Figure 9. Apical realizations in initial position (first group).



Álvarez Pérez (2014)
グレーが濃い程 apical 化

この例は、版本 DJ393B40S (gg3R)

Xexenagui. *Cano de immundicias*. (セセナギ、汚水の流れる管)

で、*immundicia* は、ラテン語 *immunditia* (汚穢) 由来なので、ラテン語～*tia* 系は、*cia* が正しく、*sia* は *s/ç* の混同。

しかし、原本に接した中野遙博士の写真に就くと、最初に書いたのは *s* ではなく、*n* の様にも見え、それならば、単なる筆のすべりで、音韻混同ではない。

3) 08-01RB

Nuqe, uru, eta. ¶ faga nuquru. スケ、ヌクル、スケタ。歯ガ抜クル。

Cairẽ os dentes aos velhos. ¶ Xiuoga [...] (老人の歯が抜ける) シオガ…

Discrepar a cousa do proprio em cejo (言うべき・為すべき好機を逸する)

hauia de dizer, ou fazer.

これは、版本 DJ369A17S (aa3R)

Xiuoga nuqeta. (潮ガ抜ケタ)。 *Discrepar a cousa do proprio ensejo* (その好機を逃す)

に相当し、*ensejo* を *emcejo* とした、*se/ce* の混同。

3.7. キリシタン文献での *s/ç* 弁別

キリシタン時代 (16 世紀末～17 世紀初頭) のポ語は、*s* (apical) / *ç* (dorsal) 混乱が進んだ時代で、キリシタン文献も、それを反映している。

3.7.1. 版本「サントスの御作業」(1591) 言葉の和らげの *s/ç* 混乱

ST2A01 An-ba. 鞍 - 馬 *Cualo celado* [*selado* 鞍を置いた馬] *s → c*

ST51B02 Tan-zocu 嘆息.i. naguequ coto 嘆く事 *Aflicção, ançia* [*ansia* 嘆き]
同上

ST12A10 Cuxxi,suru. 屈し、屈する *Enfadarse câçarse* [*cansarse* 疲れる]
同上

cf. ST2A12 An-von. 安穩 *Prosperidade l. descâso* [*descansar* 疲れを休める : 正用]

ST57B14 Xei-fit. 静謐 *Apasiguarse* [*apaciguar* 宥める] , *aquietarse* [宥める]
ç → s

3.7.2. 版本「平家・イソボ・金句集」(1593) 言葉の和らげの *s/ç* 混乱

p.11 Fiõxi, *Compaço*. 拍子。(compasso (拍子) *s → ç*)

p.15 Guiõdõ. 行道 T çuranatte michiuo yuqu coto. 連なって道を行く事。l. *Passear.l.Fazer prosição*. 行列で通る。(proçissão 行列、*ç → s*、*s → ç*)

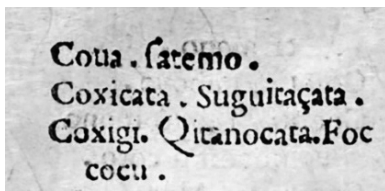
Gocai. 五戒 *Sinco mandamêtos que deo Xaca*. 釈迦が与えた五つの戒律。(cinco 五、

ç → s)

Gococu. 五穀 Mugui,comeno taguy. 麦・米の類。i, sinco legumes. 五つの野菜
(同上)

p.26 Rocudô 六道 Gigocu,gaqi,chicuxô,xura,nin,den coreuo rocudôto yû. i. 地獄、餓鬼、
畜生、修羅、人、天、これを六道と言う。 sinco *Infernos que os gentios poen*. 異教
徒が想定する5つの地獄。(同上、尚「5つ」は天道を除いたか)¹⁶⁾。

本書版本「平家・イソボ・金句集」の「言葉の和らげ」日本語部分には、他のキリシ
タン版(版本)には見られない、日本語のサ sa を ça で書いた例がある。



p.8 Coxicata. Suguita cata. 来し方。過ぎた沙汰。
(通常の表記では sata)

山本昌子(1976) p.96 は、これを Suguita cata (過ぎた方) と読むが、ç の cedilha
は明瞭。

文脈も「来し方行く末を思い／語り」(巻4、281-18、300-2)で、「過ぎた沙汰」で通
ずる。又、日ポ辞書が、正にここ(巻4:281-18)をポ訳しており、

DJ043A12 (L3R) Coxicata yucusuyeno cotodomouo cataritçuzzuqete samezameto
nacareta. Fei. L. 4. *Continuando a pratica do que tinha passado, & do que auia de*
acontecer …来し方、行く末の事共を語り続けてさめざめと泣かれた。平家巻四。(過
去に起った事と、これから遭う事になる事を語り続けて…)

と、このポ訳でも、「過ぎた沙汰」で問題無い。

写本ならば、Manuel Barreto バチカン写本(Reg.Lat.459)に、サ sa を ça で書く例
があり、

335 ウ 6 goqinjei naçaruru xpão 御禁制なさるるキリシタン

同じく Manuel Barreto の自筆「難語句解」も、次の例が、サ sa を ça で書いている。

BG35-631R16 Muçabori, u, *hir comêdo alguã fruto abocados pouco e puoco. l,*
hir apanhãdo a fazenda a algũ pouco e pouco. ムサボリ、ムサボル。何かの果
物を、少しずつ食べながら歩く。又、他人の財産を、少しずつ手に入れる。

BG55-651R08 Tamazzuça, fumi, guiocuxo. タマヅサ。文、玉章。

16) Rodrigues 日本大文典 RG224R34 には、goacuxu, l, rocudô.l, *seis infernos, ou caminhos onde vam*
as almas, s. gigocu, gaqui, chicuxô xura, nin, den. (五悪趣、つまり六道。魂が行く六つの地獄・道、
地獄・餓鬼・畜生、修羅、人、天)とある。

尚、他の「言葉の和らげ」（ドチリナキリシタン 1592、ヒイデスの導師 1592、コンテンツスモンヂ 1596）のボ語は僅少で、そこには、s/ç 混乱は無い。

3.7.3. 版本ラポ日対訳辞書（1595）の s/ç 弁別維持

ラポ日対訳辞書のボ語には、s/ç 混乱が無いが、日ボ辞書は、s/ç 弁別が無い。

s/ç 弁別のミニマルペアを、ラポ日対訳辞書（DL）と日ボ辞書（DJ）を対照して掲げる。

1) CERRAR/SERRAR cerrar 閉める / serrar 鋸（serra）で斬る

a) CERRAR 閉める

DL124A09 Claudio, is, si, sum. *Lus. Cerrar, ou fechar.* 閉じる・閉じる。Iap. Fusagu, tozzuru, touo tatçuru, touo sasu. 塞ぐ、閉づる、戸を立つる、戸を鎖す。

DJ259C33 (Ttt3V) Togifusagui, u, ida. 閉ぢ塞ぐ。Fechar, ou cerrar como porta, entrada, &c. 閉じる、戸で入口などを塞ぐ。

b) SERRAR 斬る

DL727A33 Secamentum, i. *Lus. Pao serrado, ou que se pode serrar, ou cortar.* 切られた丸太。截断され得るもの。Iap. Quirivaqu beqi zaimocu, l, qirivaqitaru qi. 切り分くべき材木、切り分きたる木。

DJ224D20 (Kkk4R) Somadori. 杣取り。O serrar, cortar, ou fazer madeira no mato. 鋸で斬る。森で材木を作る。

2) CEGAR / SEGAR cegar 盲いる / segar 斬る

a) CEGAR 盲いる

DL092A10 Caecus, a, um. 盲目の。Lus. Couse cega. 盲目な事。Iap. Mômocu naru mono. 盲目なる者。

DJ154B01 (Qq2V) DJ154B01 ME. Manaco. 目。まなこ。Olhos. 目。… ¶ Meuo tçubusu. 目を潰す。Quebrar os olhos, ou fazer cegar. 目を傷める、盲目にする。

b) SEGAR 斬る

DL728B18 Sécula, ae. 鎌。Lus. Fouce de segar. 草を刈る鎌。Iap. Cusauo qiru cama. 草を斬る鎌。

DJ034B17 (I2V) Cama. 鎌。Fouçe de cegar erua. 草を刈る鎌。[segar の誤]

DJ067C28 (R3V) Cusagui, u. 草斬る。i. Cusauo nagu. 草を薙ぐ。Cortar, ou segar erua. 草を切る、刈る。[正用]

ラポ日対訳辞書以前の、日本イエズス会初の文法書、「天草版ラテン文典」*De institutione grammatica libri tres* (1594) のポルトガル語部分には、s/ç 混乱が無い。

日本司教 Luis Cerqueira 著「サカラメンタ提要」*Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda* (1605) は、ポルトガル語を含むが、そのボ語部分に、s/ç 混乱は無い。

3.7.4. 版本日ポ辞書の s/ç 混乱

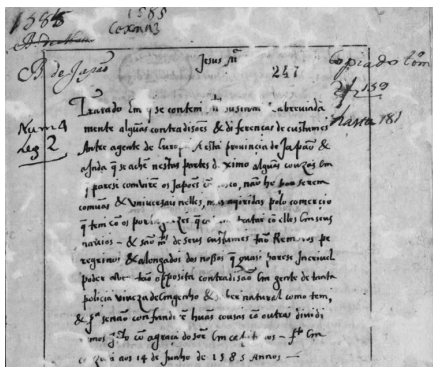
版本日ポ辞書（1603-1604）のポルトガル語は、s/ç 弁別を失っている。（DL と対照）。

- 1) CEBOLLA/ SEBOLLA (lat. caepa) 葱
DL093A10 Caepe, l, Caepa, ae. *Lus. Cebola*. Iap. Fitomoji. 一文字 [正用]
DJ180A36 (Yy4V) Negui. 葱 *Cebolas secas sem folhas*. 葉の無い葱 [正用]
DJ048A25 (M4V) Chimoto. 蒜 *Hũa erua como sebollla*. 葱の様な草 [混乱]
- 2) SUJO / ÇUJO (lat. sucidu-, es. sucio) 汚れた
DL125A28 Cloâco, as. *Lus. Sujar*. Iap. Qegasu. 汚す [正用]
DJ126A02 (Ii2V) Giocuxe. Nigotta xecai. *Mundo sujo, ou inficionad*. 濁世 [正用]
DJ003D25 (A3V) Acuye. Axij coromo. *Habito, ou vestido çujo, & grosseiro*. [混乱]
- 3) SEBE / CEBE (lat. sepes) 垣
DL736A18 Sepes, is. *Lus. Sebe, ou cerca*. Iap. Caqi, maxegaqi. (垣、籬)
DJ298D15 Xibagaqi. 柴垣 *Sebe feita de ramos*. 木で作った垣。[正用]
DJ061B27 Cõxõ. 高牆 Tacai caqi. *Cebe alta*. 高い垣 [混乱]

3.7.5. 同時代の日本イエズス会宣教師の s/ç

- 1) Luís Fróis s/ç 弁別無し。Lisboa 生まれ。

大部の「日本史」の自筆本は伝存しない。首尾完存する著作としては、「日欧文化比較」(BRAH¹⁷⁾) 33 丁が全文自筆だが、その第 1 丁のタイトルからして、*susinta* (sucinta が正)、*contradisões* (contradições) と、s/ç 混乱している。（ここ以外にも、本書の随所で混乱）。



Tratado em que se contem muito susinta e abreuviadamente algũas contradisões e diferenças de costumes Antre a gente de Europa e esta prouinçia de Japão

欧州と此処日本の人々の習慣の食い違い・相違のいくつかを、極く要約して簡潔に述べた覚書。

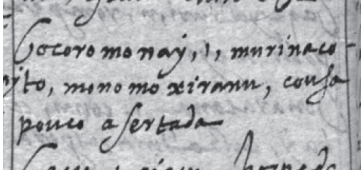
Luís Fróis (1585 自筆) 日欧文化比較

1R

17) Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid. 王立歴史アカデミー

- 2) Manuel Barreto s/ç 弁別無し¹⁸⁾。o Porto 近郊の生まれ。

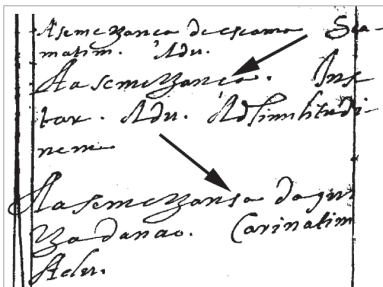
自筆「天草版平家難語句解」(British Library) 3 V



Cocoro mo nay, l, murina-co-
to, monomo xiranu, couse,
pouco asertada. [acertada の誤]

心も無い、無理な事。物も知らぬ。/ 証拠に乏しい事。

自筆「ボラ辞書」Vocabulário Lusitanico Latino¹⁹⁾ (1607 頃) (BACL²⁰⁾) 1-13D



Aa semelhança de escama. Squamatim. Adu. [依
拠原典 DL]

Aa semelhança. Instar. Adu. Ad similitudinem.
[Cardoso]

Aa semelhansa da quilha do nao. Carinatim.
Adu. [DL]

同一語 *semelhança* を s/ç 二様に表記。

綴りの差は、依拠原典 DL (ラポ日対訳辞書)・
Cardoso (Ditiornarium Lusitanico Latinum) に
由来するものではない。

尚、adu (副詞) の位置の前後は、依拠原典の差か。

- 3) João Rodrigues s/ç 弁別あり。Sernancelhe 生まれ。

- a) 1626 年マカオ発書簡第一經由 (全文自筆、ARSI²¹⁾ JAPSIN 18-I, 66V)

a esta perseguiçam, que vai por 39 annos que começou no ano de 1587 (1587 年に始
まったこの迫害は、今 39 年経った処)

- b) 1626 年マカオ発書簡第二經由 (同上の別筆副本、ARSI JAPSIN 18-I, 71V) s/ç 混乱。

a esta perseguiçam, que vay por 39 annos q~ comesou no ano

18) 柄田千尋 (2023) は、Barreto の assa (朝) 等の日本語二重子音表記に就て、「バレットを含め同時代の宣教師も 2 種類の摩擦音 [s/s、本稿の表記で s/ç] を聞き分けることができた可能性は十分にある。」(p.11) として、「彼らは日本語母語話者が知覚しないサ行音の摩擦の強弱を知覚し、強い摩擦音を「s」よりも表音的に表そうとし」た (p.15) とするが、この二音は、Barreto 自身が、母国語でも書き分け得ないものであるから、その「表音」性には疑問も残る。

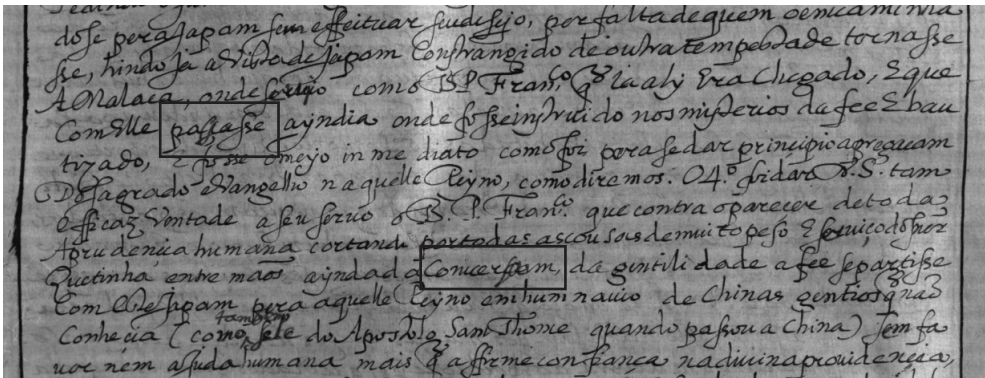
19) 岸本・豊島 (2005)

20) Biblioteca da academia das Ciências de Lisboa リスボン学術アカデミー図書館

21) Archivum Romanum Societatis Iesu (イエズス会ローマ文書館)

começar (始まる) を、a) 自筆本はç (正用)、b) 副本は同時代の日本イエズス会の書写者がs (混乱) で書写。著者 João Rodrigues 自らは、s/ç 弁別維持の表記を行なうが、そのコピー役の人物はs/ç 弁別が無く、たとえイエズス会本部への報告という、忠実なコピーが要求される局面でも、s/ç の混乱程度なら許容範囲と考えられていた事を示す。

c) João Rodrigues は、自著原稿の他筆清書本の s/ç 混乱を、自筆で訂正している。



João Rodrigues *História de igreja de Japam* 日本教会史 A 写本 (BRAH, -7238: 他筆清書・著者自筆訂正本) 15R

A Malaca, onde sendo como S. P. Fran [sis] co, q~ ia alý era chegando, e que com elle paçasse aynda onde fosse intruido nos imperios da fee e bautizado, e fosse o meyo immediato como foi pera se dar principio agrauam ... e seruiço do snõr que tinha entre mãos aynda da conuersam da gentiliidade a fee se partisse

paçasse → *passasse*、*conuersam* → *conuerçam* と、清書者の s/ç 誤綴を訂正。

「日本教会史」は、João Rodrigues 畢生の大作で、結局刊行に至らなかった。自筆稿本2種B・C写本(用紙は楮紙・竹紙)と、他筆清書本に自筆で校正を入れたA写本が、BRAHに残る。A写本は、高級紙鳥の子を使った組版工用の清書本で、著者 Rodrigues は、厳格に校正を入れて s/ç 混乱を修正している。

d) João Rodrigues の日本大文典(1604-1608)には、s/ç 混乱が無い。

日本大文典 57R には、s/ç 区別を前提とした、日本語サ行音記述がある。

¶ Na pronunçiação japoa não ha propriamente a letra, S, simples como no latim, & no Portugues assi como Cesar, casa, casar, &c. Mas tem mais propriamente a letra, ç, portuguesa, & castelhana, como quando dizemos, çapato, caça, moço, doçura. O que se ve claramente, na conuerſam das ſyllabas: por que, ça, ço, çu, ſe mudam em, Za, zo, zu, que ſam letras dobradas: pello que quem quizer vsar de, sa, so, su, deue carregar hum pouco com n-ayor força que na nreſa pronunçiação: & quem quizer vsar de, ça, ço, çu, não carregue tanto, que caſa n. ou- ta eſtremo de pronunçiar chiçoſo.

Na pronunçiação japoa não ha propriamente a letra, S, simples como no latim & no como Portugues ... Mas tem mais propriamente a letra Ç, portuguesa, & castelhana, como quando dizemos, Çapato, caça, moço, se mudam em, Za, Zo, Zu, que sam letras dobradas: pello que quem quizer vsar de, Sa, so, su, deue carregar hum pouco com mayor força que na nossa pronunçiação.

日本語には（ラテン語・ポ語の様な）単純な S は無い。寧ろポ語・スペイン語の ç であって、Çapato 靴, caça 狩, moço 童と云う時の様に発音し、二重音の Za Zo Zu に変化〔連濁〕する。sa so su の綴りを使うなら、ポ語の発音よりも強い力を少し加える様にすべきである。

この記述は、日ポ辞書の様に s/ç 混乱した組版では意味不明になりかねないので、上記「日本教会史」A 写本の様に、組版工用清書本に、著者自らが厳格な校正を入れた結果の版面であろう。「日本大文典」（1604-1608）は、印刷に大いに手間取り、4 年中断するが、この「日本大文典」印刷時の経験が、「日本教会史」清書本（1633）に、厳格な校正を入れさせる遠因となったのかも知れない。

一方、João Rodrigues は、*am / ão* の綴り²²⁾の揺れには寛容で、自筆本にも 2 形並存するだけでなく、自分の名前 *João* すら、*Joam* (1622, 1626, 1627) / *João* (1612, 1616) と二様に署名する程だが、この *am / ão* は、版本日本大文典では、94 丁までが *ã*o、95 丁からは *am* と整理されている。（丸山 1984）。これは、著者自身の表記規範ではない事が明らかで、文選・組版時に実施された規範である。同様に、日ポ辞書は、本篇がほぼ *ã*o、補遺篇が *am* 専用であり（豊島 2021a）、これも文選・組版時の規範であろう。

- 4) João Rodrigues「日本大文典」クロフォード家本（6 V）への書き込み（筆者不明）²³⁾。
弁別無し。

No presente mudão E, l, ue, em uru. Mochiy acresêta uru.

22) 現代語では、動詞完了過去 *amaram*、単純未来 *amarão*、名詞 *cão*（犬）等と書き分ける。

23) 2024 年 12 月に原本を調査された黒川茉莉博士にも、書き込みの綴りを確認して頂いた。

[現在形の E や ue を uru に変える。モチイにウルを加える]

acrescenta を *acresenta* と s/c 混乱。

3.8. 同時代のポ語辞書の s/ç 混乱

Manuel Barreto 自筆ポラ辞書が同時代の典拠の一つとしている Cardoso ポラ辞書にも、s/ç の混乱が見られる。

- 1) alcançar / alcansar 到達する (*alcançar* が正用)

Cardoso (1592LP) 209RB

☞ si leonina pellis nō satis est, vulpina addenda. ライオンの皮で足らずは、加うるに狐の皮を以てせよ。Se não abastar pelle de lião *acrescêtese pelle de raposa. Dá a entender q~ quem não puder alcançar a cousa por força, alcãse a por êgano.* ライオンの皮で満足しない者には、狐の皮も加えよ。力で目的を遂げられない奴は、騙してでも遂げよ。(1 例目の不定法 *alcançar* は正用、*alcãse* は接続法 *alcance* を *alcanse* と書いた s/ç 混用)。

- 2) sabujo / çabujo 獵犬 (*sabujo* が正用)

Cardoso (1592LP) 167R

Plaudicanes. Os *çabujos*. (獵犬、*sabujo* の s/ç 混用)

3.9. キリシタン版ポ語の s/ç 弁別の要約

- A) s/ç 弁別あり

João Rodrigues (自筆日本教会史稿本、自筆書簡、版本日本大文典 (1604-1608))、天草版ラテン文典 (1594) ポ語部分、ラポ日対訳辞書 (1595) ポ語部分、サカラメント提要 (1605) ポ語部分

- B) s/ç 弁別無し

サントスの御作業和らげ、天草版平家・イソポの和らげ、日ポ辞書 (1603-1604)、Luís Fróis (自筆: 日欧文化比較)、Manuel Barreto (自筆: 平家難語句解、自筆: ポラ辞書)、João Rodrigues 「日本大文典」クロフォード家本へのポ語書き込み (筆者不明)

要約すると、s/ç 弁別が厳格なのは、個人方言 *idiolect* に s/ç 弁別を持つ著者の著作と、ラテン語を含む出版のポ語のみであり、それ以外では、s/ç 弁別は維持されない。

恐らく、ラテン語を含む難度の高い組版では、高度の学力を備えたチームが事に当って、版下用清書・印刷ゲラ刷に厳格な校正を加えた結果、s/ç 弁別も維持されたのだろう²⁴⁾。ラテン語を含まない文献では、そうした厳格な校正の余裕が無く、s/ç 弁別も維持出来な

24) ラポ日対訳辞書は、

DL093A10 Caepe, l, Caepa, ae. Lus. *Cebola*、

DL736A18 Sepes, is. Lus. *Sebe*.

の様に、直前に語源のラテン語が明示されるので、混乱しにくいという事情もある。

かったのだと想像される。

3.10. 日ポ断簡 s/ç 弁別の不在の評価

1. 版本日ポ辞書自体も、s/ç 弁別が無いので、本断簡の日ポ断簡に s/ç 弁別が無いのは、矛盾しない。
2. João Rodrigues の様な、s/ç 弁別のある人物による書写とは、考え難い。
3. Manuel Barreto は、s/ç 弁別を持たない人物なので、この日ポ断簡を Manuel Barreto 書写と見ても、矛盾しない。

版本ラポ日対訳辞書（1595）には s/ç 弁別が維持されており、João Rodrigues（自筆本、版本文法書）にも、s/ç 弁別は維持されているので、s/ç 弁別は、当時は、周到な注意と校正を行なえば維持し得る状態だった。Toulouse 日ポ断簡は、その注意が欠けた処で作成され、厳格な校正を経る機会も無く、現在に至ったと考えられよう。

4. 前期国字本『あにゆすていの功力の次第』（仮）

4.1. 基本書誌と本文翻刻

本章では、『あにゆすていの功力の次第』の書誌、活字、欧文典拠と日本での伝承の概要を述べる。活字、欧文典拠、日本での伝承のいずれも、本稿ではごく基本的な記述にとどめ、詳細は別稿にて論じる予定である。

本資料は上部・左端などが欠けているが、大きさはおおよそ縦（左端）31.4 × 横 21.8cm であり、美濃紙（約 39.4 × 27.2cm）に印刷されたものの断簡とみられる。後述する欧文典拠と同じ印刷形態が採られたとするならば、製本を想定しない一枚刷りだったと考えられる。裏面に印字や書入れはない。トゥールーズ断簡中に同活字を使用した小片 2 点も存する。

現存するテキストは以下の通りである。〔 〕は筆者による注記である。

〔…〕 いの功力の次第

〔…〕 はうるはの〔Papa Urbano か 教皇ウルバヌス〕こんす

〔…〕 うと云所の帝王へ此

〔…〕 くり参らせらるゝ

〔…〕 そへをくり給ふ者也

- 一 此貴き御功力の物は世界の御扶手貴きこるてろ〔cordeiro 小羊〕と名付奉る御主貴理師度〔Christo〕の御うまにたあて〔humanidade 人性〕の御所をあらはし奉る者也
- 二 或はいかつち或は大風けきらう〔激浪〕又は火事に對する所の功德をこめ給ふ者也
- 三 悪風ぬきれい〔疫癘〕とん死〔頓死〕其外いかなるうつりやすきやまひにも對する所の
大徳あり

四 此御功力を以て御主てうす〔Deus 神〕なんさん〔難産〕にをよふ母又其子ともにつゝ、かなくまもり給ふ者也

五 天狗のさまたけ又は何たるてんたさん〔tentação 誘惑〕色身あにま〔anima 靈魂〕にてきよりなす所の万のしやうけ〔障碍〕をのかし給ふ徳儀あり

六 右条々の徳儀は此功力の物の下地とはあは〔Papa 教皇〕のとなへ給ふ御ようもん〔要文〕を以てあきらかにあらはるゝ

〔…〕大徳はあけてかそふへからす是即実のひいてす〔Fides 信仰〕と深き信心ある人々のこゝろみ

〔…〕〇たゝし時として其徳をおほへさる事あり是なを其人の為徳となるへき

〔…〕めすにより万事をよくしろしめす御上に

〔…〕り我等が御主にて御座ますてう

〔…〕とくはからひ給ふと分別すへき者也

〔…〕つさにをひて〔加津佐にをひて？〕すへり□れす〔Superiores か 上長〕の御赦しを蒙り此儀あり

後述するように本資料は、欧文資料および禁教以降伝承されたオラショにほぼ一致するものがあること、残存する標題「いの功力の次第」から、信仰具アニユスデイの効験を説いたものと判断できる。仮題中の「あにゆすてい」は、現存するキリシタン版国字本のうち日本語文中に用いられている例はないが、後期国字本『おらしよの翻訳』（1600）（天理図書館）のラテン語おらしよ「たつときびるぜんまりやのらだいにあす（聖母マリアの連祷）」に「あにゆすでいきたうりすべかたむんぢ」（26 オ）〔Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, (世の罪を除き給う神の小羊)〕とあること、本資料に濁点付活字が用いられていないことから推測した。²⁵⁾

史料中確実な記録は見いだせていないが、本文末尾の活字（後述）および伝承されたオラショの文言から、1591 年加津佐版であることはほぼ確かである。以下 1592 年年報（1590 年 10 月～1592 年 9 月のできごとを対象としている）に記された、日本の文字で印刷された短いものの一つとみなしうる。

1592 年 10 月 1 日付長崎発、日本イエズス会年報²⁶⁾

今年、われわれの文字を用いた日本語の書籍が何冊か印刷された。それは、聖人たちの生

25) ポルトガル語よみに近い G 音を含む「あぐぬす」等の表記は、かくれキリシタンに伝承された文言に認められないため採らなかった。

26) 高瀬（2017:209）ただし、フリガナおよび注を割愛した。

涯およびキリスト教教理に関するものである。…さらにいくつかのものが日本文字で印刷された。それらの中に、問答体で作られたキリスト教教理の書籍がある。…

また彼らの〔日本語〕言語と文字で、ロザリオの15のミステリヨ、オラショトマンダメントス、その他いくつかの短いものが印刷された。これを、キリスト教徒たちは大いに利用している。…

加津佐での印刷は、コレジオが1590年8月・9月ごろ有家から移動し、1591年5月天草へ移動するまでの間と考えられる。現存のキリシタン版で「加津佐」の名が印刷されているのは従来、ローマ字本『サントスのご作業』（1591）のみであった。『あにゆすていの功力の次第』は新たに出現した加津佐版であり、前期国字本のうち、刊行地が印刷された唯一の例である。

4.2. 活字について

本節では、『あにゆすていの功力の次第』に使用された活字影印の分析に基づいた刊行時期の推定と、濁音表示からみた平仮名表記の特徴について説明する。

キリシタン版国字本は、使用活字により極初期カタカナ本、前期国字本、後期国字本に分類される。極初期カタカナ本は「サルベレジイナ」他の断簡で、カタカナ主体で多少の漢字を含む試作段階の印刷だと推定される。『あにゆすていの功力の次第』を含む前期国字本は変体仮名を含むひらがな活字と約200字種の漢字活字の混用である。後期国字本は活字全体を入れ替え、ひらがなに連綿活字を多用しつつ3,000字種に達する漢字活字を取り入れたキリシタン版国字本の完成形で、同時代を代表する活字印刷物として知られている。

表1 キリシタン版国字本の分類

	文献	刊行年	刊行地
極初期カタカナ本	サルベレジイナ 他	?	加津佐?
前期国字本	あにゆすていの功力の次第	?	加津佐
	初期祈祷文	1591?	加津佐?
	どちりいなきりしたん	1591?	
	ばうちずもの授けやう	1593?	天草?
	さるばとるむんぢ(ユトレヒト本)	1595?	
後期国字本	さるばとるむんぢ(カサナテンセ本)	1598	長崎?
	落葉集	1598	
	ぎやどぺかどる	1599	
	どちりいなきりしたん	1600	長崎
	おらしよの翻訳	1600	
	朗詠雑筆	1600	長崎?
	ひですの経	1611	長崎
	太平記抜書	1611-12?	?

前期国字本は刊記をもたないため刊行年・刊行地を特定しにくい、『あにゆすていの功力の次第』の本文には「加津佐(かづさ)」を示すと思われる表記がある(図1)。中央上部の書標(モノグラム)(図2)は『原マルチノの演説』(1588年ゴア刊)の書標(図3)に一致する(富永(1978:199)ではI番)。書標の下に装飾模様(ビニエット)も富永(1978:199)で2番に分類され1590～96年にかけて『どちりいなきりしたん』他に、周囲を取り囲む枠線は同じく1番に分類され1588～1611年にかけて多くのキリシタン版に使用されており、特に珍しいものではない。

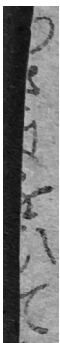


図1 (か) つさ



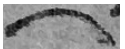
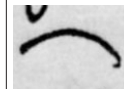
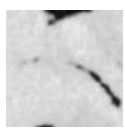
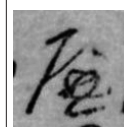
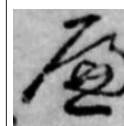
図2 書標と装飾模様

図3 『原マルチノの演説』の書標²⁷⁾

27) 筑波大学図書館公開画像より引用した。

『あにゆすていの功力の次第』は表2～4に示す活字印影および濁点活字不使用の特徴からみて、前期国字本として最も早く印刷されたと推定できる。

表2 仮名「へ」「べ」の使用活字（数値は使用回数、以下同じ）

	功力の次第	祈祷文 ²⁸⁾	どちらいな ²⁹⁾	ばうちずも ³⁰⁾	さるばとる ³¹⁾
〔へ a〕	 4	 11	 252	 3	
〔へ a〕 傾斜			 3		
〔へ b〕	 4		 19	 2	
〔へ b〕 傾斜				 24	 14
〔へ c〕			 100 *13 丁から	 94	 130
〔べ〕		 4	 264 *9 丁から	 126	 175

前期国字本の連綿活字は「たる」「給ふ」のみなので濁音表示には関係せず、単独活字だけが調査の対象となる。

仮名「へ」には、傾斜活字を含めて5種、「べ」には1種類の活字があり、印刷の進行につれて使用活字が入れ替わる。前期国字本では〔へ a〕〔へ b〕が当初から使用され、途中から〔へ c〕に移行したと考えるなら、〔へ c〕を含まない『あにゆすていの功力の次第』『初期祈祷文』は早い段階の印刷だと推定できる。

28) 上智大学キリシタン文庫公開画像より引用した。

29) 小島・亀井解説（1979）より引用した。

30) 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編（1976）より引用した。

31) ユトレヒト大学図書館公開画像より引用した。

表3 仮名「を」の使用活字

	功力の次第	祈祷文	どちらいな	ばうちずも	さるばとる
 [を]	12	17	795	4	
 [を] 傾斜			316 *57 丁から	378	579

表4 仮名「か」「が」の使用活字

	功力の次第	祈祷文	どちらいな	ばうちずも	さるばとる
 [か a]	9	5	420	180	254
 [か b]		1	135	4	
 [か c]			60 *22 丁から	90	118
 [か d]				1	
 [が]		8	281	32	15

仮名「を」「か(が)」(表3、表4)も同様で、『あにゆすていの功力の次第』を最も早い印刷として位置づけることで、文献間での使用活字の増減を矛盾なく説明できる。[かc]と[を](傾斜活字)は[へc]と同じく『どちらいなきりしたん』の途中で初出している。

また、手元の調査では『あにゆすていの功力の次第』を除く前期国字本は濁音仮名が期待される箇所でおおむね9割程度に濁音仮名活字を使用しており、『あにゆすていの功力の次第』の傾向は特殊である。濁音が期待される19箇所には以下のとおりすべて清音仮名活字が使われている。

和語：いかつち、つつがなく、さまたけ、のかし、かそふ、へからす、おほへさる、なるへき、我等か、分別すへき

漢語：けきらう(激浪)、なんさん(難産)、しやうけ(障礙)

原語：うるは(の)(ウルバノ)、こるてろ(コルデイロ)、てうす(デウス)、はあは(パアパ)、ひいてす(ヒイデス)

その他：(か)つさ(加津佐)

他の前期国字本で助動詞「べし」や格助詞「が」が清音仮名活字になることもあり、語種も多用であるからこれらの用例自体が特殊なわけではないが、濁音仮名活字が全くみられないのは『あにゆすていの功力の次第』独自の方針である。表5は一部の語について、濁音仮名が期待される位置での清音仮名活字／濁音仮名活字の使用状況をみたものである。

表5 濁音が期待される位置での使用活字（清音／濁音）

	功力の次第	祈祷文	どちらいな	ばうちずも	さるばとる
のがす	1 / 0	0 / 1	0 / 9	0 / 1	—
おほゆ	1 / 0	—	0 / 1	0 / 1	0 / 3
ごとく・ごとし	—	0 / 2	2 / 52	3 / 8	1 / 28
べし	3 / 0	0 / 1	34 / 190	16 / 117	4 / 156
が	1 / 0	0 / 5	9 / 119	21 / 3	19 / 0
でうす	2* / 0	0 / 3	1 / 169	1 / 39	3 / 33
ひいです	1 / 0	—	2 / 27	1 / 20	0 / 4
どちらいな	—	—	0 / 6	—	—

* 推定箇所1例を含む

先に紹介したように『どちらいなきりしたん』では冒頭部分に〔べ〕が使用されず助動詞「べし」が「へし」となるため清音仮名活字の用例数が多い。『ばうちずもの授けやう』では「我らか」のように格助詞「が」の期待される位置で清音活字になる例が多く、『さるばとるむんち』（ユトレヒト本）ではその傾向が徹底するなど部分的に表記上の相違も現れているが、全体的に濁音仮名活字を不使用としたのは『あにゆすていの功力の次第』のみである。

『あにゆすていの功力の次第』が前期国字本として最も早い時期の印刷であり、濁音仮名活字を全く使用しなかったとすると、この段階で濁音仮名活字を保有していなかったという可能性も検討すべきである。しかし豊島（2010）によればキリシタン版前期国字本の活字はヨーロッパ製であり、山口（1992）によれば日本国内での金属活字鑄造は既存活字を利用した再鑄造（そのため表2や表3に示したように形は同じだが角度が異なる斜形活字を生じる）や部分削除（〔男〕の「田」を削除して〔力〕とするなど）に限られるので、濁音仮名活字を途中で追加したとは考えにくい。「きけこすせそたてとはひふほ」の各仮名では清音仮名活字と濁音仮名活字の本体部分の形状が明確に異なるので、基本的には清音仮名活字と濁音仮名活字はもともと別活字として用意されており、表2の〔へc〕や表4の〔かc〕のように一部の清音活字が『どちらいなきりしたん』の途中から使用されるのは、仮名の本体部分の形状が同じ濁音活字の濁点部分を削除したためと考えるのが自然である。

なお、半濁音活字は前期国字本では全くみられず後期国字本に使用される。濁音活字と半

濁音活字の使用状況からみた印刷順序は表6のように推定でき、このことは使用活字の状況とも矛盾しない。

表6 濁音活字・半濁音活字の使用状況（左から右に進行）

	前期国字本		後期国字本
	功力の次第	他4本	
濁音仮名活字	使用せず	おおむね使用	使用
半濁音仮名活字	使用せず	使用せず	使用

以上より、前期国字本はキリシタン版国字本における補助符号表示の試行段階の刊行物だと位置づけられるだろう。

4.3. 信仰具アニウスデイと欧文典拠

ここでは、『あにゆすていの功力の次第』に記されている信仰具アニウスデイについて、浅野（2023）などの先行研究によりつつ述べた後、典拠にごく近いと思われる欧文資料を紹介する。

「アニウスデイ」（ラテン語 Agnus Dei「神の小羊」の意味）はイエスの象徴とされてきた。それは、洗礼者ヨハネがイエスをその名で呼び（ヨハネによる福音書第1章29節、36節）、イエスが十字架上の死によりこの世の罪を贖った、神に捧げられた小羊とみなされたことによる。信仰具アニウスデイはこの信仰に基づき、円形または楕円形の蜜蝋に小羊の図像が彫られたものである。教皇就任の年の復活祭と、その後7年おきの復活祭に作られていた。信仰具（英語 devotional objects）とは、ミサに必要なカリスや祭壇布などの祭具（聖具）とは異なる、民間信仰に依拠する信心具である。キリシタン時代の遺物としては、メダイ（メダル）、コンタツ（ロザリオ、その珠）、ジシビリナ（苦行鞭）などが現存している。アニウスデイは現存していないようであるが、アニウスデイなどを入れたと思われる袋がいくつか残っている。

ヨーロッパにおけるアニウスデイの歴史は明らかではないところが少なくないが、先にあげた浅野（2023）と、それに引用されている Troyon（1912）に基づき、アニウスデイ信仰の成立と16世紀ごろの信仰についてまとめる。少々長くなるが浅野（2023）から引用させていただく（原文の「r.」を「在位」とあらため、注65を省略した）。

アグヌスデイの成立に関して詳細な研究を残したランスの神学校長O. トロヨン Troyon の記述に従えば、「アグヌスデイの祝福」の文献初出は9世紀のローマ教会暦までさかの

ばるといふ。それによると、聖土曜日の朝、助祭長が教会に来て大きな器に蠟を溶かし、聖油を入れて祈りを捧げ、羊の姿を刻み、定められた場所に置き、復活祭後の第一日曜日に助祭長によって聖餐後に信者に配られた。この典礼は16世紀から20世紀初頭まで大差無く行われるが、10世紀以後、配布するのは教皇の役目となる。15世紀ローマでは、人々の需要が高まり、400リブラ（約131kg）もの蠟を用意しなければならなくなり、信徒自身に必要な分量の蠟を持ち込ませるようになったという。このように人気を博したにもかかわらず、無償で配られていたため、贋作が横行し、1470年3月21日の勅書で、パウルス2世（在位1464-1471）はアグヌスデイの製作、祝福、配布は教皇のみの権限と定め、翌年、シクストゥス4世（在位1471-1484）は、アグヌスデイの贋作、販売、不敬な取り扱いに対して厳しい科を課すとした。その後、アグヌスデイの型はサンタ・ブデンツィアーナ教会、後に、サンタ・クローチェ・イン・ジェルサレン教会のシトー会士に預けられた。今日、「アグヌスデイの祝福」は、公私の二つに分かれ、公のものは教皇の着座年、その後数えて7年毎に行われるが、非公式の典礼は適宜行われている。

浅野（2023:21-22）にも言及されており、アニウスデイ信仰に関しよく知られているのが、1366年に教皇ウルバヌス5世（在位1362-1370）から東ローマ帝国皇帝ヨハネス5世パレオロゴス（在位1341-1391）に、アニウスデイとともに贈られたというラテン語詩である。これについて Troyon（1912）は、ヨハネス5世パレオロゴスが、アヴィニョンのウルバヌス5世のもとを訪れたことに対する謝意を示したものとする。アニウスデイは、雷などの悪天候、水難などの自然災害、火事、難産、病気、悪魔の障害という、生きていく中でふりかかってくる各種災難から人間を守ってくれる効力があるといい、トゥールーズ断簡『あにゆすていの功力の次第』の内容に近い。

Balsamus et munda cera cum crismatis vnda	〔バルサムと清らかな蠟に聖油を加えて
Conficiunt agnum quem do tibi munere	小羊が成り、それを贈物としてあなたに贈り
magnum.	ます。
Fonte uelut natum per mistica sanctificatum	泉から生まれ、神秘的に聖別されて、
Fulgura de sursum repellit omne malignum.	雷や全ての邪悪を払います。
Pregnans seruatur sine ve partus liberatur	妊娠している者は安産をし、
Portatus munde seruat de fluctibus vnde.	清らかに運べば水難に遭いません。
Peccatum frangit ut Christi sanguis et angit.	キリストの血のように、罪を壊し消します。
Dona confert dignis uirtutes destruit ignis.	ふさわしい者に徳を与え、火を消し、
Morte repentina seruat sathaneque ruina.	突然の死、サタンのもたらす害より救います。
Si quis honoret eum retinet ab hoste	これを尊ぶ者は、敵からの勝利を得ます。〕
triumphum.	

さらに、断簡の直接の典拠に近い一枚刷りがポルトガル国立図書館に所蔵されていることが判明した。1585 年リスボンにて印刷された、*Summario das virtudes da sancta reliquia Agnus Dei* (聖遺物³²⁾ アニウスデイの徳の要綱) と題するパンフレットである。このようなパンフレットは数多く印刷され、しかも現存するものが少ないとみられるため典拠と特定することはできないが、六箇条に分けた説明とその順序など、内容の類似点が多い。ここでは本文と試訳、基本書誌と印刷者を紹介するにとどめ、キリシタン版との詳細な比較は次稿に譲る。

IESVS. SVMMARIO DAS virtudes da sancta reliquia AGNVS DEI, segundo o Ceremonial Romano. 〔イエズス。ローマ儀礼書に基づく、聖遺物アニウスデイの徳(効力)の要綱〕

1. ESTA sagrada reliquia representa a santa humanidade de Christo nosso Senhor, innocente cordeiro, saluador do mundo, mostrado por sam João Bautista, & sacrificado no altar da Cruz pera remedio de nossos peccados. 〔1. この聖遺物は、私たちの主キリストの聖なる人性を象徴している。キリストは無垢の小羊、世界の救世主であると洗礼者聖ヨハネによって示され、私たちの罪の救いのために十字架の祭壇にて犠牲になられた〕
2. Tem outras misteriosas significações do santo oleo & balsamo com que pello santo Padre he benta & sagrada. 〔2. 教皇聖下によって祝福され聖別された聖油と香油の、ほか

32) アニウスデイは遺品ではないが、reliquia は一般に「聖遺物」と訳され、浅野 (2023:24) に「遅くとも 17 世紀には、アグヌスデイは聖体や聖遺物同様の崇敬対象とされていた」とあることから、「聖遺物」の訳語を用いる。

の神秘的な意義も持っている]

3. Tem virtude contra os coriscos, trouoadas, tempestades, & ondas do mar, & contra o incendio de fogo. [3. 雷、嵐、海の波と、火事に対する効力を持っている]

4. Contra a corrução do ar, peste, & morte subitanea, & contra qualquer doença contagiosa. [4. 空気の汚染、疫病、突然の死、そしてあらゆる伝染病に対しても効力を持っている]

5. Por seu meyo liura Deos nosso Senhor as mulheres & crianças de perigo na hora do parto. [5. この聖遺物を通じて、私たちの主なる神は出産時の女性と子供を危険から守る]

6. Tem virtude contra as tentações & enganos do Demonio, & contra os mais enemigos da alma & corpo. [6. 悪魔の誘惑や欺瞞、靈魂と肉体の敵に対する効力を持っている]

¶ Outras muitas virtudes obra Deos nosso senhor por meyo desta santa reliquia, como experimentam os que com deuação & reuerencia a trazem, mas estas pareceo apontar, assi por se pedirem nas orações de sua benção, como por se acharem escritas do Papa Vrbano quinto, ao Emperador de Constantinopla, quando lhe mandou tres Agnus Dei, os quaes se escreue q~ recebeo o dito Emperador com solêne procissão do pouo. [他にも多くの効力があり、この聖遺物を通じて私たちの主なる神が行う。信仰と敬意を持ってこれを携える者たちは、その効力を体験する。これらの徳は特に祝福の祈りにおいて求められるが、それは教皇ウルバヌス5世がコンスタンチノーブルの皇帝に送った3つのAgnus Deiについて記した文章に見られる通りである。これらのAgnus Deiを皇帝は民衆とともに荘厳な行列で受け取ったと記されている]

¶ Poderseha imprimir este Summario. Em Lisboa a 3. De Junho, de 1585. Paulo Afonso. Jorge Sarrao. Antonio de Mendoca. [この要綱の印刷を許可する。1585年6月3日、リスボンにて。パウロ・アフォンソ、ジョルジェ・サラオン、アントニオ・デ・メンドーサ]

本資料は洋紙24.8 × 16.9 cmの一枚刷りであり、裏面に印字はない。所蔵するポルトガル国立図書館により画像が公開されており、Aquisição pela BNP de impresso quinhentista desconhecido（ポルトガル国立図書館による、未知の16世紀の印刷物の新収）と題する紹介記事がある。³³⁾これによると2010年12月のオークションにて購入された、それまで知られていなかった印刷物という。この記事では、使用されている洗札者ヨハネの版画やビニエット、飾り文字などから、印刷者をAntónio Ribeiroと推定している。António Ribeiroは

33) 画像 <https://purl.pt/22622> 紹介記事 “Aquisição pela BNP de impresso quinhentista desconhecido.” https://www.bnportugal.gov.pt/index.php?option=com_content&view=article&id=574%3Aaquisicao-pela-bnp-de-impresso-quinhentista-desconhecido&catid=49%3Aaquisicoes&Itemid=617&lang=pt

16世紀後半ポルトガルにおける最大手の印刷業者であり、Anselmo (1926:267) によると、1580年以降王室の印刷業者・リスボン大司教の印刷業者であった。日本およびキリシタン版と直接の関係があり、天正遣欧使節の一行がリスボン滞在中、ヴァリニャーノ『日本のカテキズモ』(1586 リスボン) 巻1の印刷を行った人物である³⁴⁾。Ribeiroの印刷所で作成されたAgnus Deiのパンフレットが日本にもたらされた可能性は十分考えられる。

ラテン語詩、ポルトガル語のパンフレットに書かれているアニウスデイの効力を示すヨーロッパでの逸話は、Cooper (2018)、浅野 (2009) に複数あげられている。16世紀半ばの教皇ピウス5世伝には、テベレ川が氾濫しかけた時に教皇がアニウスデイを一つ投げ入れると水位が下がり始めたという話がある。ピウス5世伝にはそのほかにも、重度の火傷の上にアニウスデイを置くと傷が消えた話など、アニウスデイによる奇跡が15ページにわたり紹介されている。このような信仰のもと、ヨーロッパの民衆は袋や容器にアニウスデイを入れ、家の外でも携帯するようになっていたという。

4.4. 後世への伝承

前節のように、アニウスデイは物だけでなく、いわば「お守り」として信仰、そしておそらくそれを書いたパンフレットとあわせてヨーロッパから伝わった。実際、日本人信徒がアニウスデイを他の信仰具とともに重んじた様子は、しばしば宣教師の報告に書かれている。これらの例は近年、後藤 (2015)、松尾 (2022) にも詳しく紹介されており、筆者も別稿にて追補する予定だが、ここでは浅野 (2023) から引用する(筆者による要約と、原文の注のうち出典に関わるものを〔 〕に入れて補った)。ヨーロッパと類似するこれら奇跡譚が、日本でも起こったと信じられ、喧伝されたことが注目される。

〔筆者注：初期キリシタン時代の日本では、大型のアニウスデイの記録も見られるが、〕一般の信徒たちが、守り袋などに入れて首からかけていたのは、アグヌスデイという名こそ伝わるものの、完形であったとは考えられず、一片の蠟のかけらにすぎず、原形に刻印された羊の姿を見たことのある信徒はまれだったのではないだろうか。しかしながら、アグヌスデイの本来の用途は、かなり正確に伝わっていたようだ。

すなわち、アグヌスデイがその最大の功力を発揮するのは、悪魔払いにおいてであった。西洋と同じく、日本でも精神疾患は悪魔(悪霊)がついたためと考えられており、首にアグヌスデイの(おそらく)かけらの入った守り袋あるいは聖遺物入れをかけることで退散させている。たとえば、越後の異教徒の青年は心を乱し衰弱していったが、1人のキリシ

34) 豊島 (2013:145-148)

タンが首にアグヌスデイをかけてやるとサタンが山伏の姿をして現れ出で青年は正気を取り戻したという。また、重い天然痘にかかった子供を快復させて〔1609・1610年度ジョアン・ロドリゲス・ジランによる日本年報、松田毅一監訳（1987-1997）II-1:128〕、泣き叫ぶ臨終の子供の首にかけると静まり〔同前、松田毅一監訳（1987-1997）II-1:183〕82、異教徒の乳母の頭の上に何度も置いて、大いに魂の慰めを得たと述べられている〔1606・1607年の日本の諸事、松田毅一監訳（1987-1997）I-5:286〕。さらに、豊後で発布された禁教令の一項目に「ロザリオ、聖像、アグヌスデイを引き渡さねばならない」と定められており〔1612年度ジョアン・ロドリゲス・ジランによる日本年報、松田毅一監訳（1987-1997）II-1:356〕、さながらキリシタンにとっての三種の神器のような位置にあることを行政側も認めていたことがわかる。

このようなアグヌスデイは、日本に持ち込まれた際に「贖宥」というプレミアムが付与されていることについて信者たちも理解していたようである。フロイスの『日本史』によると貴人でさえ、2～3週間かけて入手しようと躍起になり、ある時は一片が1,500人以上の人に分け与えられた〔Frois I:357, III:248〕という。簡単に作ることでできる蜜蠟製ということで、日本にもたらされたものすべてが真正のものであったか否かは疑問の残るところだが、細断された破片を小袋に入れて首にかけることがキリシタンとしての符牒ともなっただと考えられる。

上にふれられているアニヌスデイの「贖宥」（免償）については後述する。印刷された『あにゆすていの功力の次第』の文言全体は、ほぼそのまま、オラシヨとして潜伏時代・復活時代に、外海・五島系のかくれキリシタンに伝わった。長崎地方のかくれキリシタンはその信仰形態により、暦を中心とする長崎・外海・五島系と、納戸神を中心とする生月・平戸系に分類されてきたが（田北（1954:7-8））、アニヌスデイのオラシヨが伝わっていたのは長崎・外海・五島系のみのものである。

これらは、全文が活字化されたオラシヨに限定しても、片岡弥吉ほか編（1972）掲載の「外海のオラシヨ（一）」（外海町下黒崎郷松本の「帳」傳承）、「外海のオラシヨ（二）」（黒崎・松尾彌藏舊藏上野七識本）、「外海のオラシヨ（三）」（東樫山・入口氏藏本）、「五島のオラシヨ」（道脇増太郎本抄）、浦川和一郎（1928）附録「浦上、外海、五島地方に伝へ来りし祈禱文ならびに年中行事」のうち「アネイスティの功力」、濱崎（2003）などに掲載の「五九里き」（崎津・山下家）など多数見ることができる³⁵⁾。

35) このほかに全文ではないが、児島（2022）が「生きた人のみのかきに申すウ（オ）ラツシヨ」（ノートタイトル「天主の十戒」、長崎市外海歴史民俗資料館蔵）、「アネースデーゴクリキ」（外海地方下黒崎の水方のノート、個人蔵）を引用している。

ここでは、キリシタン版の文言を比較的よく残している片岡弥吉ほか編（1972）掲載の「外海のオラシヨ（一）」（外海町下黒崎郷松本の「帳」傳承）を、キリシタン版の内容にあわせ適宜改行して引用する。

アネスデイ様のくりき

アネスデー様のくりきのしだい、

五代目のパッパ、パウロはコンスタンチノホラというところのくりき。

そのくりき、ごくりき、よにかゝつてのくりき、コロテルと名をつけ奉る。御身のくりきとはことわりとのこと。オンマニダーデーおんところをあらわせたもう。

ならばいかづち、ならば大風、疫病、頓死する、そのほかいかなるうつりやすき病なりとも、またはごごとのだいくりきをこめたもうものなり、

そのほかいかなるうつりやすき病なりともごくりきの御力をもつて悪風、災難、おんしのぎ申すようにだいくりきをこめたもうものなり。

四つでは、御身デウスのなんざんに及ぶ母又は子供をつゝがなくあとを守らせたもう。

五つではテンタのさまだけまたはなんたるテンタサン、アニマしきしんてき（敵）やんなさるばんのしやうけんをのがしたもうごくりきをこめたもうものなり。

六つでは、ごくりきのものしたしとして、パッパの御となえ、御ようしやをもつて、あきらかにあらわすこと。これらのくりきをあげてかぞうべからず。

これじつしよのヒデスにうけ奉る。げんきさま、心ある人々の心で知ること、ただときとしてこのくりきを覚えざることあり、これなおその人のごくりきとおぼしめすにより萬事御親様より、御身でござります、デウスかくのごとくにはからいたもう。おんぜんすべきおんようしやをもつてきたる千五百九十一年目のつかさにおいてはスペリオレスの御許しをこうむるなり、このぎよりアメン。

外来語など多くの箇所転訛が見られるが、上のオラシヨのほか傳承されたものはほぼいづれも末尾に「591（年）」「つかさ」の語が含まれている。「つかさ」は地名「加津佐」が名詞「司」と混同されたものであり、トゥールーズ断簡国字版の文言が典拠であろう。

宮崎（2018:135）はかくれキリシタンのオラシヨを、宣教師によって16～17世紀に伝えられたものを今に受け継いでいる「傳承のオラシヨ」と、正統なカトリックのオラシヨにはない、必要に迫られて後になって彼ら自身が造りだした「創作のオラシヨ」とに大別している。アニヌスデイのオラシヨは前者「傳承のオラシヨ」の一つとみなされていたが、トゥールーズ断簡の発見によって典拠の存在が明白になったのである。

このおらしよのほか、長崎・外海・五島系のかくれキリシタンの間では、他のオラシヨ類

にも「アネステ様」等の名がみえることが知られている。ここでは二つ、「ドソン（ルソン）のオラショ」と「天地始之事」の文言にふれておく。「ドソン（ルソン）のオラショ」を片岡弥吉ほか編（1972）より引用する。下線は筆者による。

こんた、いませ、べろにか、くるす、あにうすでい、れりきあの御くきりきの次第、右のうち、いつれなりとも、一しょもち、ねざめならば、おきあがる時、うやまいもて、（後略）

こんた（ロザリオの珠）、いませ（聖画）、べろにか（ヴェロニカのメダル）³⁶⁾、くるす（十字架）、あにうすでい、れりきあ（聖遺物）のどれでも一つ持ち敬って祈ることで、部分免償が得られるというものである。岡（2014）によると、教皇グレゴリウス 14 世（在位 1590-1591）のときに認められた免償の内容が、後継のインノケンティウス 9 世（在位 1591）の時に明文化されたものであろうといい、『あにゆすていの功力の次第』の印刷と時期が重なる。1591 年当時日本人信徒の間に、種々の効能を持つアニュスデイに対する信仰が高まったことが推測される。³⁷⁾

さらに、外海の黒崎地方に伝わる「天地始之事」には少なくとも二カ所、アニュスデイ信仰との関連が推測される文言がある。田北（1954）より引用する。一つは冒頭部の天地創造の箇所である。

一、そも／＼てうすと、うやまい奉るは、天地の御あるじ、人間万もつの御おやにて、ましますなり。（中略）十二天をつくらせたもふ。其なべんぼう、此所いぬへると申す地ごく也。まんぼうとは此世界なり。おりへてん、しだい、ごだい、はつば、おろは、こんしたんちのほら、ころてる。十まんのはらいそ、（後略）

彼らの間に伝わっていたアニュスデイのオラショ（下線部）がこの物語の中へ割り込んでいいるということは、田北が指摘している通りである。もう一つは、「御身後世助始てなさしめたもふ事」において、幼児や聖人が上天することを述べたあと末尾に「あねいすてら」が現れる箇所である。

36) ヴェロニカのメダルについては浅野（2009）に詳しいが、基本的に「キリストの尊顔」の図像のみ、または「聖女ヴェロニカがキリストの顔のうつた布を広げている様子」の図像をもつメダルをいう。

37) 『あにゆすていの功力の次第』および「ドソン（ルソン）のオラショ」から、1591 年頃日本イエズス会ではアニュスデイによる信心業を推奨していたように見える。信仰具などさまざまな物を信徒に授ける権限は、巡察師ヴァリニャーノのもと招集された第一回協議会（1580-1581）・第二回協議会（1590）にて議論された点の一つであった（井手（1995）にこれらの記録の翻訳がある）。協議会裁決がどのように宣教実践に反映されているか、今後検証が必要なところである。

水くみのべろうにかは、あねいすてらと、くらいをうけ、此世のくりきとまもらせたもふといふ事。

上の「べろうにか」は人名であり、「あねいすてら」はその人に与えられた位のようなものであるが、「ドソン（ルソン）のオラショ」においてヴェロニカ（のメダイ）とアニュスデイとが「くりき（功力）」のある信仰具として列挙されていることと関連があろう。

5. おわりに

本稿では、日葡辞書稿本とキリシタン版『あにゆすていの功力の次第』の出現が、キリシタン版編纂・印刷、またその伝承の過程を解明する新たな手がかりであることを具体的に示した。冒頭に記したように、本稿は新出資料を用いた研究の端緒であり、今後他資料と比較検討した諸研究を続けていく予定である。

参考文献

- 浅野ひとみ（2009）「信心具としての「ヴェロニカのメダイ」」『純心人文研究』15
- 浅野ひとみ（2023）「キリシタン信仰具 アグヌスデイ・ノミナ・苦行鞭」『覚醒する禁教期キリシタン文化』長崎純心大学
- 井手勝美（1995）『キリシタン思想史研究序説』ペリカン社
- 浦川和三郎（1928）『切支丹の復活 後篇』日本カトリック刊行会
- 大塚光信解説（1998）『エヴォラ本 日葡辞書』清文堂
- 岡美穂子（2014）「長崎外海のカクレキリシタン信仰に見る托鉢修道会の布教活動」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム—人類学的比較研究—』風響社
- 片岡弥吉ほか編（1972）『日本庶民生活史料集成第十八巻 民間宗教』三一書房
- 岸本恵実・白井純編（2022）『キリシタン語学入門』八木書店
- 岸本恵実・白井純・折井善果（2024）「キリシタン版『さるばとるむんぢ』ユトレヒト大学本の発見：思想史およびキリシタン語学からの検討」『大阪大学大学院人文学研究科紀要』1
- 岸本恵実・豊島正之（2005）「バレット著「葡羅辞書」のキリシタン語学に於ける意義」石塚晴通教授退職記念会編『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 小島幸枝・亀井孝解説（1979）『どちりいなきりしたん：バチカン本』勉誠社
- 児島康子（2022）「カクレキリシタンの信仰におけるキリスト教の認識—外海地方東檜山地区を通して—」『人間文化研究』20
- 後藤晃一（2015）『キリシタン遺物の考古学的研究：布教期におけるキリシタン遺物流入のプロセス』溪水社

- 白井純（2005）「キリシタン版前期国字本の平仮名活字について」『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 白井純（2020）「キリシタン版後期国字本のタイポグラフィー—漢字活字の制作と運用について—」『北研學刊』18
- 高瀬弘一郎（2017）『キリシタン時代のコレジオ』八木書店
- 田北耕也（1954）『昭和時代の潜伏キリシタン』国書刊行会
- 竹井成美（2000）『『サカラメント提要』が語るもの—ザビエルが伝え、残したもの』Sophia University Press.
- 柄田千尋（2023）「バレット写本のサ行二重子音表記」『国語国文』92（9）
- 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編（1976）『きりしたん版集一』天理図書館
- 土井忠生（1939）「吉利支丹版」『雲雀笛』7
- 土井忠生（1971）『吉利支丹語学の研究 新版』三省堂
- 土井忠生・長南実・森田武編（1989）『邦訳 日葡辞書』岩波書店
- 富永牧太（1978）『きりしたん版文字攷』富永牧太先生論文集刊行会
- 豊島正之（2010）「前期キリシタン版の漢字活字に就て」『国語と国文学』87（3）
- 豊島正之（2013）「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店
- 豊島正之（2021a）「キリシタン版『ラポ日対訳辞書』のポルトガル語綴り字規範に就て」『上智大学国文学科紀要』38
- 豊島正之（2021b）「【キリシタン版】キリシタン文献」藤本幸夫編『書物・印刷・本屋』勉誠出版
- 中園成生（2018）『かくれキリシタンの起源：信仰と信者の実相』弦書房
- 中野遙（2017）「キリシタン版『日葡辞書』補遺篇の見出し語—本篇との重出語について—」『上智国文学論集』50
- 中野遙（2018）「キリシタン版『日葡辞書』の訓釈について—『落葉集』定訓との対照を中心に—」『上智大学国文学論集』51
- 濱崎献作（2003）『天草の伝承—キリシタンその変容と消滅／石に遺された信仰の証』サンタ・マリア館
- 松尾恒一（2022）「長崎外海地域におけるスペイン托鉢修道会系の布教の伝承：『ドソンのオラショ』『天地始之事』に注目して」『年刊藝能』28
- 松田毅一監訳（1987-1997）『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』同朋舎
- 丸山徹（1984）「ロドリゲス日本文典におけるポルトガル語正書法—/aw/の表記について」『南山国文学論集』8
- 皆川達夫監修・解説（2006）『CD & DVD 版 洋楽渡来考』日本伝統文化振興財団

- 宮崎賢太郎 (2018) 『カクレキリシタン 現代に生きる民俗信仰』 KADOKAWA
- 森田武 (1976) 『天草版平家物語難語句解の研究』 清文堂出版
- 森田武 (1993) 『日葡辞書提要』 清文堂出版
- 山口忠男 (1992) 「初期キリシタン版の国字大字本について―「ばうちずもの授けやう」の印刷面を中心として」『ビブリア』 98
- 山本昌子 (1976) 『キリシタン版ローマ字本ことばの和らげ集』 上智大学国文学会
- Álvarez Pérez, Xosé Afonso (2014) “European Portuguese dialectal features: a comparison with Cintra’s proposal.” *Journal of Portuguese Linguistics*, 13-1. <https://www.academia.edu/10029186/>
- Anselmo, António Joaquim (1926) *Bibliografia das obras impressas em Portugal no século XVI*. Lisboa: Oficinas Gráficas da Biblioteca Nacional.
- Barrau, Clément (1776) *Catalogue de la bibliothèque du clergé de Toulouse, fait par Clément Barrau, prêtre, premier bibliothécaire, en 1776. Sous-bibliothécaire, M. Lasserre*. MS.
- Bellas, Jacqueline, Canguilhem, Philippe, Maillard, Jean-Christophe, Hernebring Patrick (2003) *Entre les lignes de la portée: quand la musique se donne à voir*. Paris: Fédération française pour la coopération des bibliothèques, des métiers du livre et de la documentation.
- Bibliothèque municipale Toulouse (1956) *Présence du Portugal à Toulouse: XVIIe-XVIIIe siècles*. Toulouse: Bibliothèque municipale Toulouse.
- Caillet Maurice (1960) *Les Richesses de la Bibliothèque Municipale de Toulouse*, Toulouse, C.P.I.L.
- Cintra, Luís F. Lindley (1971) *Nova proposta de classificação dos dialectos galego-portugueses* in Cintra (1983) *Estudos de dialectologia portuguesa* (Sá da Costa, Lisboa) , pp. 117-164.
- Cooper, Irene Galandra (2018) “Investigating the ‘Case’ of the Agnus Dei in Sixteenth-Century Italian Homes.” In Corry Maya, Faini Marco, Meneghin Alessia eds. *Domestic Devotions in Early Modern Italy*. Leiden: Brill.
- Cordier, Henri (1912) *Bibliotheca Japonica*. Paris: Imprimerie Nationale.
- Luís Fróis; edição anotada por José Wicki (1976-1984) *Historia de Japam*. Lisboa: Biblioteca Nacional de Lisboa.
- MADISON : Centro de linguística da univ. de Lisboa: MADISON (*Mapa dialetal sonoro*)
<http://teitok.clul.ul.pt/madison/index.php?action=geomap>
- Satow, Ernest Mason (1888) *The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610*. Privately printed.
- Teyssier, Paul (1982 2ed.) *História da língua Portuguesa*. Lisboa: Sá da Costa.
- Troyon, Octavien (1912) “Les Agnus Dei. Leur b énédiction à Rome et leurs usages”. *Rome*, n.º 99.

『サカラメント提要』影印一覧

トゥールーズ図書館本：<https://rosalis.bibliotheque.toulouse.fr/ark:/12148/bpt6k5399258w>

イエズス会ローマ文書館本：<https://archive.org/details/JapSin-I-207/mode/2up>

豊島正之解説（2014）『サカラメント提要 長崎版』勉誠出版（東洋文庫本）

高祖敏明解説（2006）『サカラメント提要』雄松堂出版（キリシタン文庫本）

大橋紀子解説（1972）「大英博物館本サカラメント提要」『近代語研究』3（大英図書館本）

高祖敏明解説（2010）『キリシタン版『サカラメント提要付録』影印・翻字・現代語文と解説』雄松堂出版（中国国家図書館本）

謝辞

本稿は、2024年8月6日開催のワークショップ「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡 ―日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に―」（於大阪大学豊中キャンパス＋Zoom）の内容にもとづくものであり、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡 ―日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に―」、および科学研究費補助金 21K13017, 23K00547, 23K00552, 23K21970 の成果の一部です。

本稿作成にあたり、Olivia Pfender氏をはじめとするトゥールーズ図書館の皆様、過去の調査に関する詳しい情報をお教えくださった國学院大学名誉教授三橋健氏に、記して謝意を表します。また、Pedro Miguel Teixeira de Aguiar Mesquita氏（ポルトガル国立図書館）、浅野ひとみ氏（長崎純心大学）、児島康子氏、中山圭氏（天草市役所）には、貴重なご教示を賜りましたこと御礼申し上げます。

Preliminary Analysis of Document Fragments Recently
Discovered at the Bibliothèque de Toulouse

Emi KISHIMOTO Haruka NAKANO Jun SHIRAI Masayuki TOYOSHIMA

In 2024, significant document fragments from the early Christian (Kirishitan) era came to light in the Toulouse Library. They were used as reinforcing materials for a Jesuit mission press, *Manuale ad Sacramenta* (Nagasaki, Japan, 1605). The materials were detached during restoration in 1991.

Of these document fragments, this paper concentrates on the manuscript of the *Vocabulário da Lingoa de Iapam* (the Japanese-Portuguese dictionary, printed in Nagasaki, from 1603 to 1604) and a leaf of *Agnus Dei no kuriki no shidai* (Virtues of Agnus Dei) probably printed in 1591, Kazusa, Japan.

These Toulouse document fragments are the sole surviving materials of the compilation process of the early Christian Missionary dictionaries.

Five document fragments exist in this category, distinguished by the stages referring to the printing of the *Vocabulário*.

1. the stage before printing of the main part. (fragment 01)
2. the stage after printing the main part, and before the printing of the supplement to the main part. (06, 07, 08, 11)

This paper clarifies the compilation process of the *Vocabulário* based on the analysis of these document fragments.

The newly appeared printed leaf in Japanese (1591, Kazusa, Japan) gives one of the earliest examples of printing Kanji/Kana movable types of the Jesuits in Japan.

It explains the efficacy of the devotional object *Agnus Dei*. A printed leaf (1585) with parallel Portuguese content exists in the Portuguese National Library. The text was handed down as a prayer among the Japanese hidden Christians in Sotome, Goto (Nagasaki, Japan) and Amakusa (Kumamoto, Japan) until modern times.